

令和 2 年春学期  
学生生活およびオンライン授業に関する  
学生アンケート結果報告書  
(学生生活パート)

令和 2 年 8 月作成

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)パンデミックが  
大学生の生活・健康に及ぼす影響  
～プレコロナおよびポストコロナ間の比較を含めて～

九州大学 キャンパスライフ・健康支援センター

## 概要

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行は、多くの人々の生活・健康に悪影響を及ぼしており、これは大学生も例外ではない。そこで我々は2020年6月1日から6月9日にかけて、九州大学の学部生と大学院生を対象に生活・健康に関するアンケートを実施した。その結果、ポストコロナにおける「生活面の特徴」としては、1.大学生生活のリズムは著しい乱れは認めない、2.インターネットに費やす時間が増えた、の2点が明らかになった。また大学生の「健康面での特徴」は、1.睡眠時間が増えた、2.少なくとも週に1度は運動をして健康維持・体力向上に努めている、3.体調に問題を抱える学生が微増し、その内訳は精神面に関連する項目が増加した、の3点にまとめられた。次に「メンタルヘルスの特徴」については、1.就職への不安を抱えている学生は多いが、プレコロナと比較して増加していない可能性がある、2.うつ病には至らないものの、精神的な不調を自覚する学生が増加している可能性が示唆された、3.4割近くの大学生が孤独感を感じている、4.悩む学生の割合は減っているが、悩みの種類(悩みの種)は増えている、の4点にまとめられた。また「防御因子(ソーシャルキャピタルなど)の特徴」については、1.経済的に困っている学生は増えていない(留学生は例外)、2.教員とのコミュニケーションは減ったが、SNSを利用して友人とはつながりを保っている、3.悩みの相談先は、学内(研究室の友人など)から学外(入学前の友人や家族)へシフトした、の3点にまとめられた。そして、大学生生活の総合評価といえる、「大学生生活の満足度」はプレコロナと比較して大幅に減少していることが分かった(8割から4割に減少)。今回のアンケート結果から、学生への支援を行うにあたって、特にメンタルヘルスおよび社会的つながりという観点からのサポートが重要であることが明らかになった。

## はじめに

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、SARS-CoV-2と呼ばれる新種コロナウイルスによって引き起こされる呼吸器感染症である<sup>(1)</sup>。SARS-CoV-2は2019年11

月に中国武漢で検出されて以来、瞬く間に世界に広まり、2020年5月末の時点で世界における感染者数は600万人を超え、死者数も37万人以上に達した<sup>(2)</sup>。COVID-19の世界的流行(パンデミック)は、医療、経済、社会、政治、文化など多方面に暗い影を落としたが、これは大学教育も例外ではなく、大学生の修学・生活・健康への悪影響が危惧される。そこで我々は、今後の修学支援に活かすべく、九州大学に在籍する大学生を対象に生活・健康に関するアンケートを実施し、大学生が置かれている現在の環境・心理状態を把握することにした。

## 目的

九州大学に所属する大学生を対象にアンケートを行い、大学生の生活および健康に及ぼされるCOVID-19パンデミックの影響を検討する。

## 方法

対象: 全学部学生・大学院生(留学生を含む)

アンケート実施期間: 2020年6月1日から6月9日

調査方法: Moodleを利用したWebアンケート

調査項目: 全38項目(属性を含む)

比較資料: 2019年度九州大学で実施された学生生活実態調査報告書

## 1.結果

### (1)回答者の属性

総回答数: 6,070件 (回答率: 33.2%)

有効回答数: 5,888名

属性: 学部生 4,328名、大学院生 1,560名、日本人 5,330名、留学生 558名

性別: 男性 3,809名、女性 2,057名、その他 22名

所属キャンパス: 伊都 4,525名、大橋 251名、馬出 781名、筑紫 245名、その他 86名

所属学部	回答数	割合(%)	所属学府	回答数	割合(%)
共創	152	3.5	人文	42	2.7
文	282	6.5	地球社会	52	3.3
教育	91	2.1	人間環境	100	6.4
法	309	7.1	法	8	0.5

経済	267	6.2
理	468	10.8
医	382	8.8
医保	272	6.3
歯	118	2.7
薬	166	3.8
工	1217	28.1
芸工	258	6.0
農	337	7.8
21世紀	9	0.2
合計	4328	100

法務	35	2.2
経済	77	4.9
理	90	5.8
数理	32	2.1
システム生命	58	3.7
医	52	3.3
医保	36	2.3
歯	18	1.2
薬	28	1.8
工	286	18.3
芸工	93	6.0
システム情報	140	9.0
総理工	224	14.4
生物資源	141	9.0
総合新領域	48	3.1
合計	1560	100

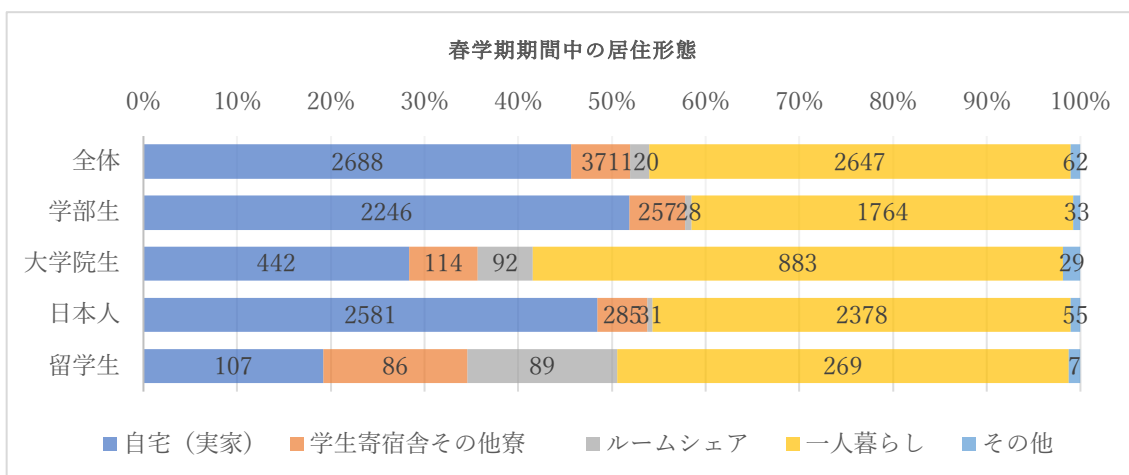
居住地	全体	学部生	大学院	日本人	留学生
1：福岡市東区	494	401	93	463	31
2：福岡市博多区	293	228	65	270	23
3：福岡市中央区	181	126	55	166	15
4：福岡市南区	276	166	110	229	47
5：福岡市城南区	91	68	23	91	0
6：福岡市早良区	202	155	47	196	6
7：福岡市西区東部(筑肥線姪浜～下)	234	180	54	214	20
8：福岡市西区今宿駅周辺	111	73	38	90	21
9：福岡市西区学研都市駅周辺	907	706	201	854	53
10：福岡市西区周船駅周辺	658	508	150	592	66
11：福岡市西区横浜	49	27	22	38	11
12：福岡市西区泉・富士見・田尻	229	158	71	200	29
13：福岡市西区元浜・九大新町	597	490	107	583	14
14：ドミトリー・協奏館	368	296	72	298	70

15：福岡市西区その他	103	77	26	84	19
16：糸島市泊	193	149	44	177	16
17：糸島市波多江駅周辺	174	135	39	146	28
18：糸島市筑前前原駅周辺	52	37	15	40	12
19：糸島市その他	51	31	20	40	11
20：宗像市	15	12	3	14	1
21：福津市	11	8	3	11	0
22：古賀市	14	12	2	14	0
23：新宮町	11	10	1	11	0
24：久山町	1	1	0	1	0
25：篠栗町	8	4	4	8	0
26：粕屋町	19	13	6	18	1
27：須恵町	4	2	2	4	0
28：志免町	9	4	5	9	0
29：宇美町	7	7	0	7	0
30：太宰府市	25	18	7	24	1
31：春日市	115	51	64	100	15
32：大野城市	134	35	99	109	25
33：筑紫野市	36	25	11	35	1
34：那珂川市	13	10	3	13	0
35：その他福岡県内	95	56	39	94	1
36：福岡県外	90	43	47	84	6
37：日本国外	18	6	12	3	15
合計(名)	5888	4328	1560	5330	558

## (2)居住形態

### 質問：春学期授業期間中の居住形態はどれですか

最も回答が多かったのが「自宅(実家)」で 2688 名/5888 名(45.7%)、次に「一人暮らし」2647 名/5888 名(45.0%)であり、あわせて全体の 90%近くを占めた。この割合は、学部生または日本人に限定した場合で類似した。一方、大学院生または留学生では「一人暮らし」が多かった。留学生では「学生寄宿舍」や「ルームシェア」がそれぞれ 15%程度を占めた。

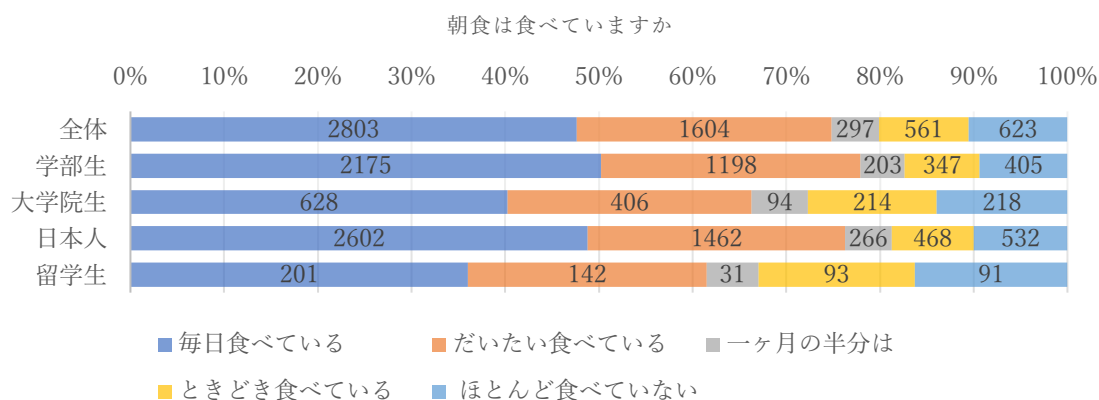


(担当:岸本)

### (3)朝食の有無

#### 質問: 朝食は食べていますか

全体では 4407 名/5888 名(74.8%)が朝食を「毎日食べている」もしくは「だいたい食べている」と回答した。この割合は、学部生または日本人よりも、大学院生または留学生で低かった。一方、大学院生または留学生では、「ときどき食べている」「ほとんど食べない」の回答率が高かった。

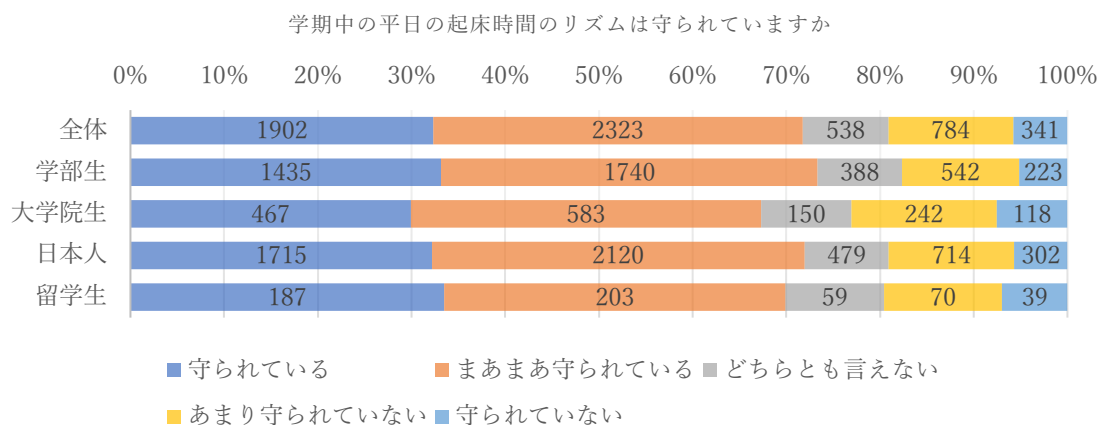


(担当:岸本)

### (4)平日の起床時間のリズム

#### 質問: 学期中の平日の起床リズムは守られていますか

全体では、4225名/5888名(71.8%)が平日の起床時間のリズムは「守られている」もしくは「だいたい守られている」と回答した。この割合は、学部生、大学院生、日本人、留学生の別に集計しても変わらなかった。



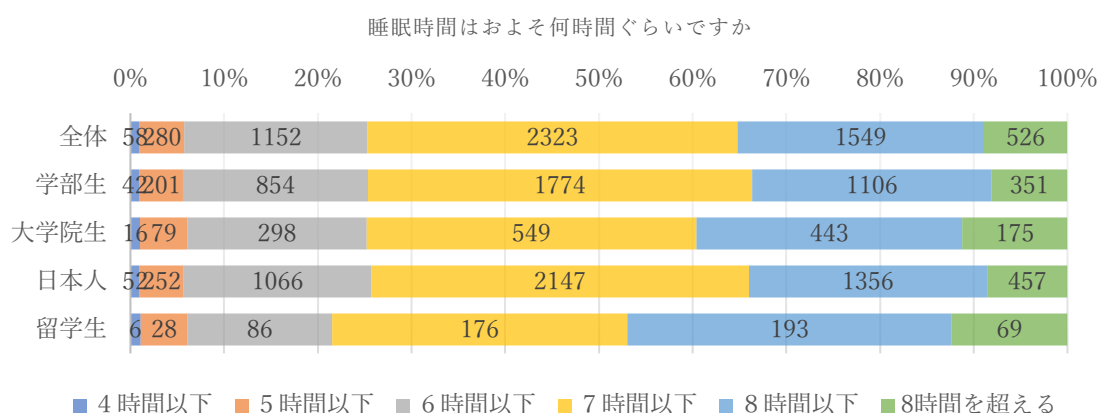
(担当:岸本)

### (5)睡眠時間

#### 質問: 睡眠時間はおよそ何時間ぐらいですか

1日の睡眠時間を「6時間以下」、「7時間以下」、または「8時間以下」と回答した学生は5024名/5888名(85.3%)であり、大半の学生は概ね適切な睡眠時間を確保できていた。しかし、一方で338名/5888名(5.7%)の学生が睡眠時間を5時間以下と回答しており、この中に睡眠に問題を抱える学生が含まれている可能性が考えられる。

また、学部生より大学院生の方が、日本人学生より留学生の方が睡眠時間の長い学生が多い傾向を認めた。

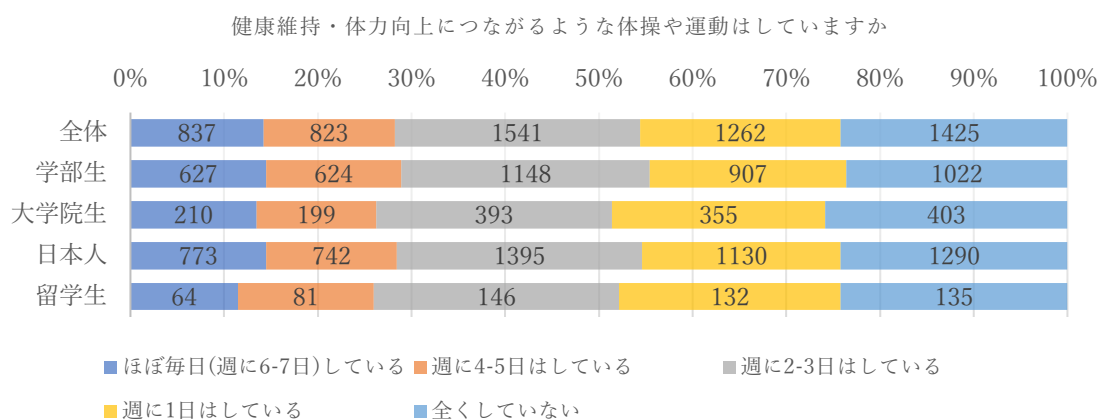


(担当:土本)

## (6)健康維持・体力向上

### 質問: 健康維持・体力向上につながるような体操や運動はしていますか

全体では、週に1日以上の運動を実践している学生は4463名/5888名(75.8%)であった。「ほぼ毎日(週に6-7日)している」、「週に4-5日はしている」は、それぞれ837名/5888名(14.2%)、823名/5888名(14.0%)であった。「週に2-3日はしている」が最も多く1541名/5888名(26.2%)、続いて「全くしていない」1425名/5888名(24.2%)、「週に1日はしている」1262名/5888名(21.4%)の順だった。この割合は、学部生、大学院生、日本人、留学生の別に集計しても同程度であった。



(担当:岸本)

## (7)最近の体調(複数回答可)

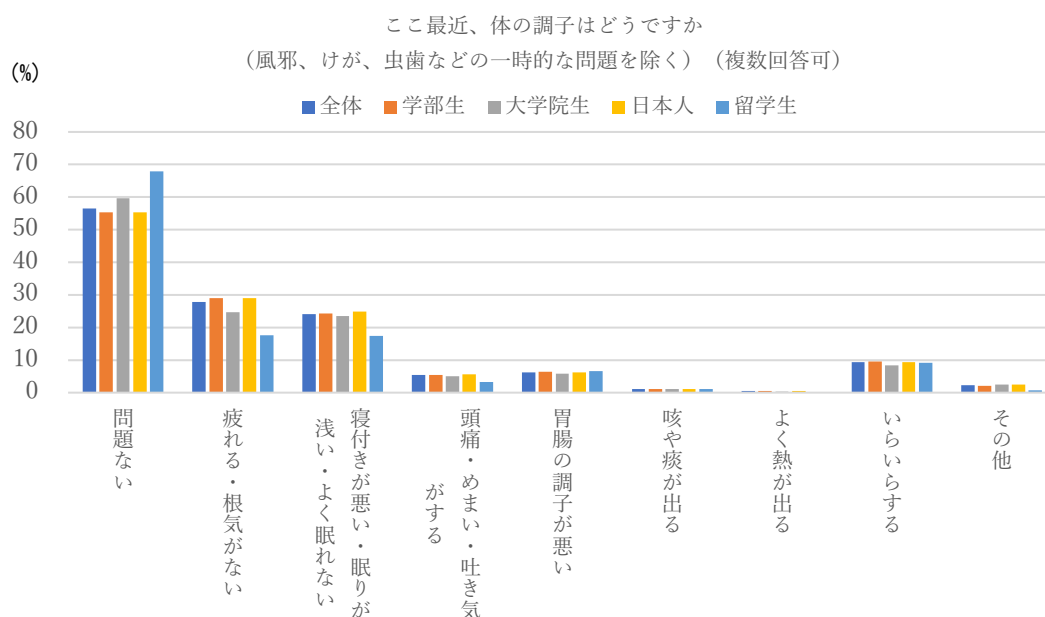
### 質問: ここ最近、体の調子はどうですか。すべて選んでください(風邪、けが、虫歯など一時的な問題を除く)(複数回答可)

3225名/5716名(56.4%)の学生が、体調に「問題ない」と回答した。内訳としては、「疲れる、根気がない」1595名/5716名(27.9%)、「寝付きが悪い、眠りが浅い、よく眠れない」1381名/5726名(24.2%)、「いらいらする」531名/5716名(9.3%)というメンタル面に関連する内容が多かった。この傾向は、学部生、大学院生、日本人学生、留学生についても同様であった。

自由記述についても、メンタル面に関連する訴えが多かったが、「疲れ目」「肩、腰の痛み」などオンライン授業の導入による影響と思われる内容も目立った。「疲れ目、視力低下、目の痛み(19名)」「精神的に不安定(16名)」「肩、腰の痛み(14名)」「強い不安感(11名)」「ストレスによる痒み、湿疹など皮膚症状の悪化(9名)」「食欲低下



(5名)」「人との交流がなく、精神的にきつい(5名)」「いくら寝ても眠たい(5名)」「便秘、下痢など消化器症状(4名)」「不眠(4名)」「やる気が出ない(1名)」「立ちくらみがする(1名)」「頭痛(1名)」「筋力の低下(1名)」「過食(1名)」「スッキリしない(1名)」。



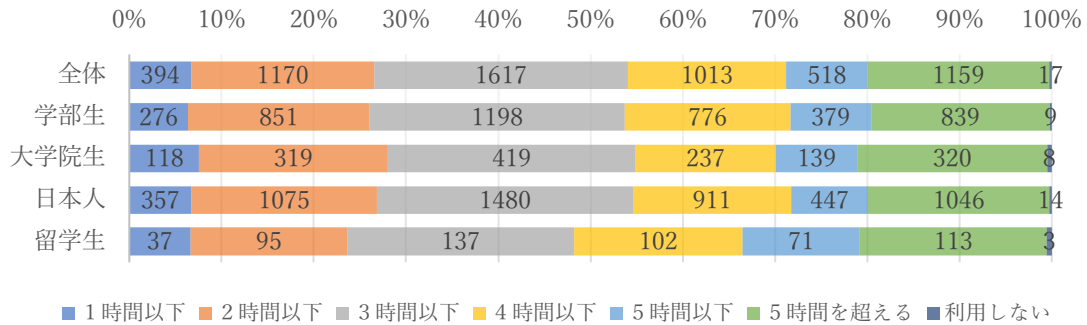
(担当: 土本)

(8)1日のうち、勉学・研究以外の目的でインターネット(メール、SNSを含む)を使用する時間

質問: 1日のうち、勉学・研究以外の目的でインターネット(メール、SNSを含む)を使用する時間はどのくらいですか

全体では、「3時間以下」が1617名/5888名(27.5%)で最も多かった。続いて、「2時間以下」1170名/5888名(19.9%)、「5時間を超える」1159名/5888名(19.7%)であった。この割合は、学部生、大学院生、日本人、留学生の別に集計しても同程度であった。

1日のうち、勉学・研究以外の目的でインターネット  
(メール、SNSを含む)を使用する時間はどのくらいですか

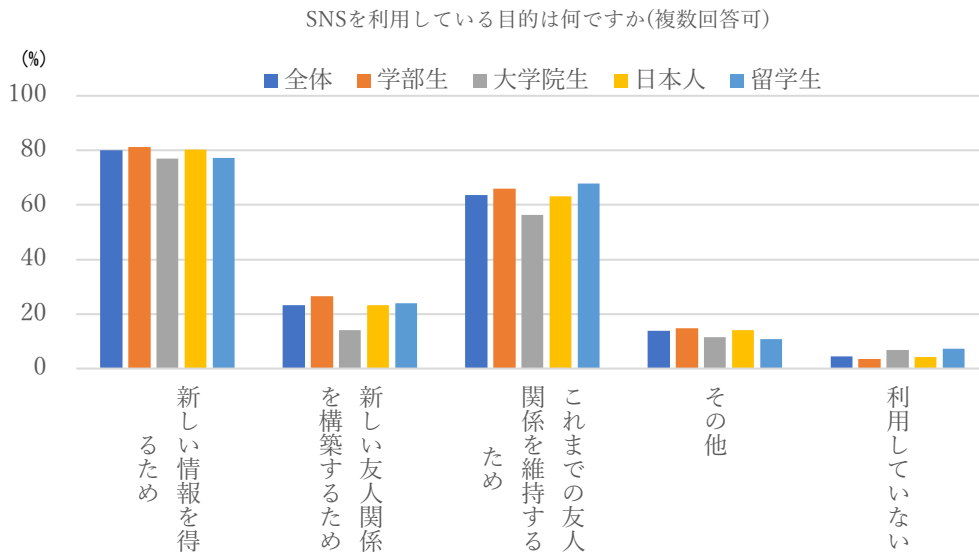


(担当:岸本)

### (9) SNS を利用している目的

質問: SNS を利用している目的はなんですか (電話・ネットも含む)(複数回答可)

全体では、回答の6割以上を占めた目的は、「新しい情報を得るため」4053名/5875名(80.1%)、「これまでの友人関係を維持するため」3731名/5875名(63.5%)であった。「新しい友人関係を構築するため」は1365名/5875名(23.2%)であり、「その他」「利用していない」の順に割合は低かった。これは、学部生、大学院生、日本人、留学生の別に集計しても同程度であった。

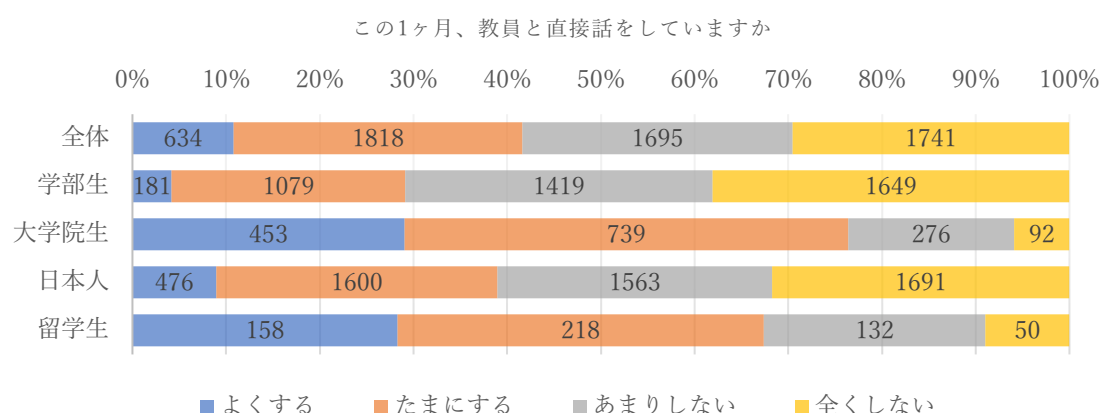


(担当:岸本)

### (10) 教員と話す機会の有無

**質問: この1ヶ月、プライベート・授業内容を含めて教員と直接話しをしていますか(電話・ネットも含む)**

学生全体としては、「よくする」「たまにする」が 2452 名/5888 名(41.6%)、「あまりしない」「全くしない」と答えた学生は 3436 名/5888 名(58.3%)であり、半数以上の 6 割近い学生が教員と話す機会が十分ではなかった。学部生においては、7 割以上の学生が教員と話す機会が十分ではなかったが、大学院生においては逆に 7 割以上の学生が教員と話す機会が取れていることがわかった。また日本人と留学生を比較すると、日本人に比べて留学生の方が教員と話す機会が取れていた(38.9% vs 67.4%)。

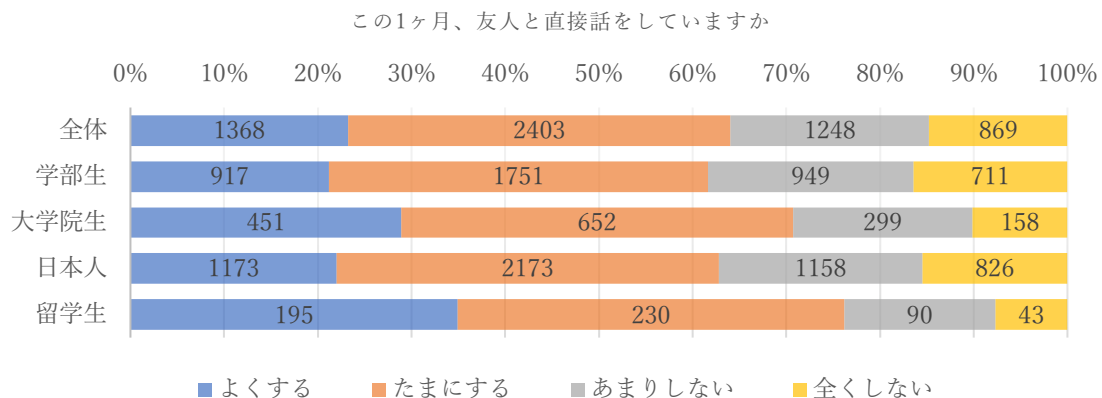


(担当: 梶谷)

**(11) 大学の友人と話す機会の有無**

**質問: この1ヶ月、大学の友人と直接話しをしていますか(電話・ネットも含む)**

学生全体としては、「よくする」「たまにする」が 3771 名/5888 名(64.0%)、「あまりしない」「全くしない」と答えた学生は 2117 名/5888 名(36.0%)であり、6 割以上の学生が友人と話す機会があったと答えた。学部生、大学院生、日本人、留学生の 4 つの属性で比較しても 6-7 割の学生が「よくする」「たまにする」と回答している。

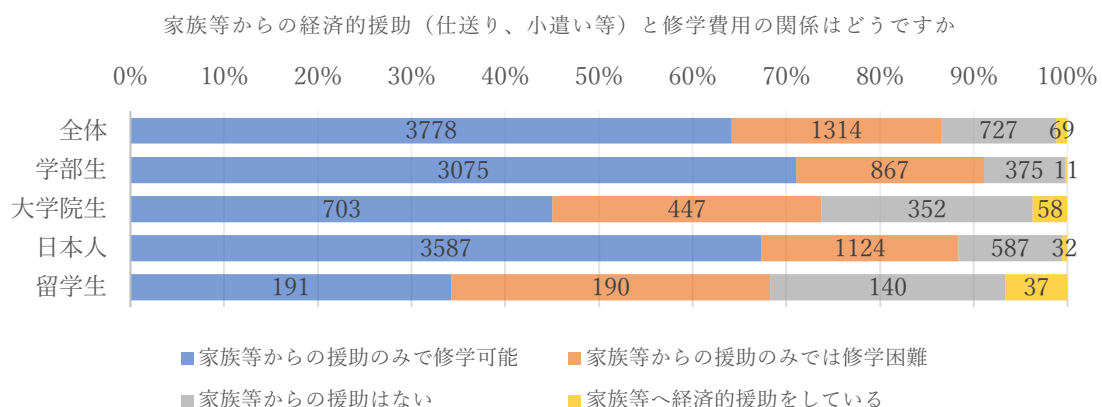


(担当: 梶谷)

## (12) 家族等からの送金と修学との関係

**質問: 家族等からの経済的援助(仕送り、小遣い等)と修学費用の関係はどうか**

全体では、「家族等からの援助のみで修学可能」は 3778 名/5888 名(64.2%)であった。続いて、「家族等からの援助のみで修学困難」が多く 1314 名/5888 名(22.3%)、「家族等からの援助はない」が 727 名/5888 名(12.3%)であった。一方、大学院生および留学生では、「家族等からの援助のみで修学可能」と回答した者は 34.2~45.1%まで減少し、「家族等からの援助はない」および「家族等へ経済的援助をしている」の割合が上昇した。

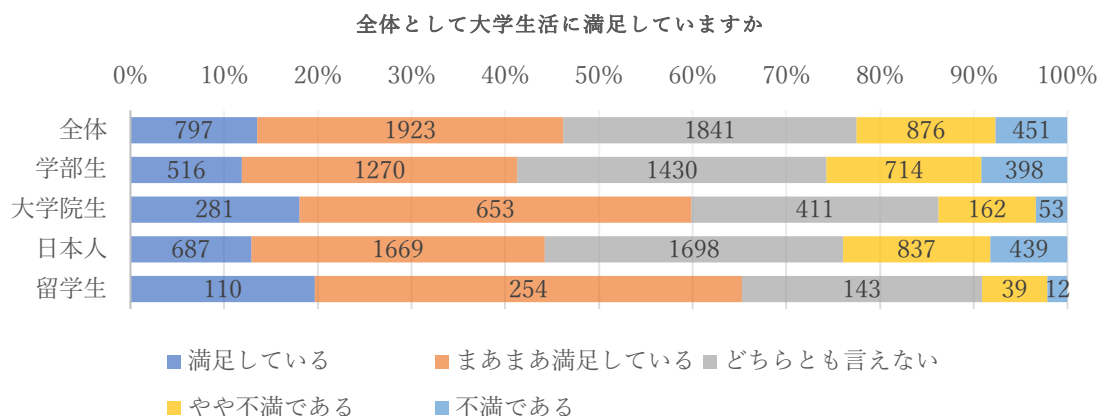


(担当: 岸本)

## (13) 大学生生活の満足度

**質問: 全体として大学生生活に満足していますか**

学生全体としては、「満足している」「まあまあ満足している」が 2720 名/5888 名 (46.1%)、「やや不満である」「不満である」と答えた学生は 1327 名/5888 名(22.5%)という結果であった。学部生と大学院生で比較すると、学部生の 4 割以上が、そして大学院生の約 6 割が「満足している」「まあまあ満足している」と答えた。



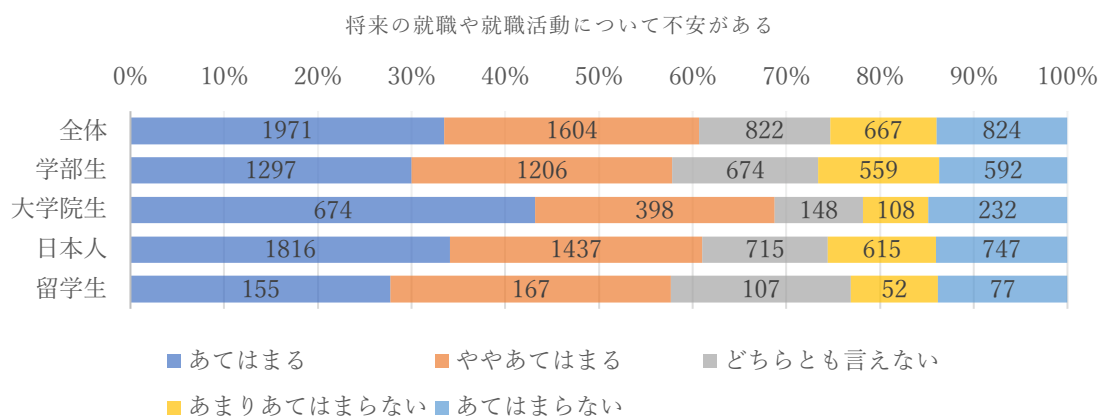
(担当:梶谷)

#### (14)大学生の精神状態

質問: この 1 ヶ月、次のことがどの程度あてはまりますか

##### A. 将来の就職や就職活動への不安がある

学生全体のうち 3575 名/5888 名(60.7%)が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した。学部生は 6 割弱の学生が、そして大学院生の 7 割弱の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」としている。日本人と留学生を比較すると、両者とも 6 割前後の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した。

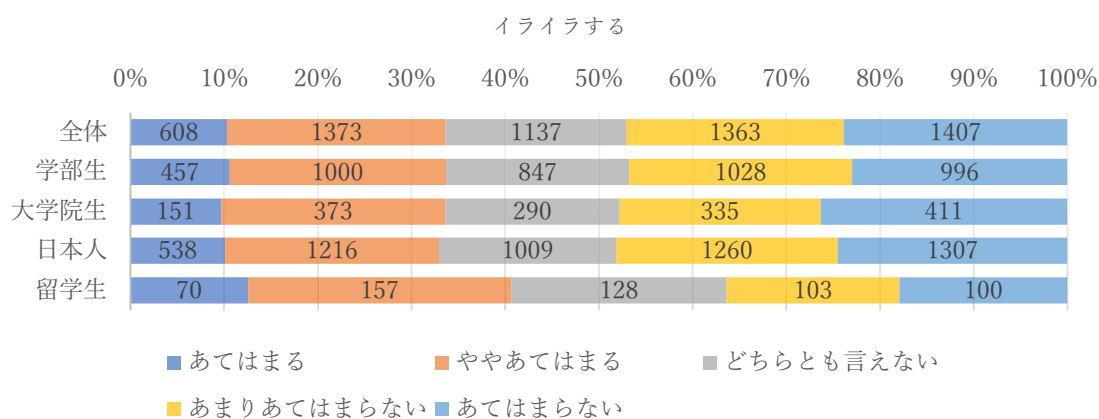


(担当:梶谷)

## B. イライラする

全体では、1981名/5888名(33.6%)の学生が「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答し、2770名/5888名(47.0%)の学生が「あてはまらない」または「あまりあてはまらない」と回答した。

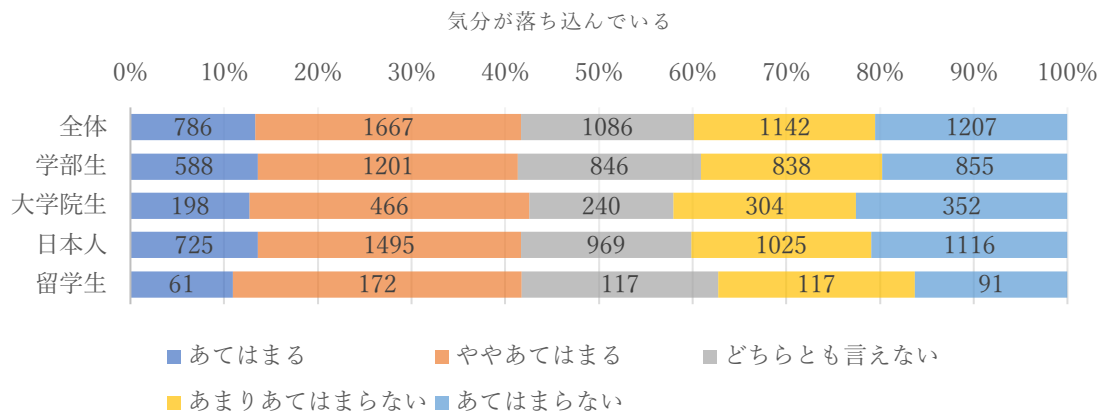
属性別では、学部生、大学院生、及び日本人学生でも同程度であり、3割強の学生が「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答した。留学生については約4割の学生が「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答しており日本人学生よりやや多い割合であった。



(担当:土本)

## C. 気分が落ち込んでいる

全体では、2453名/5888名(41.7%)の学生が「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答し、2349名/5888名(39.9%)の学生が「あてはまらない」または「あまりあてはまらない」と回答した。学部生、大学院生、日本人学生、留学生を分けて集計しても同程度であった。

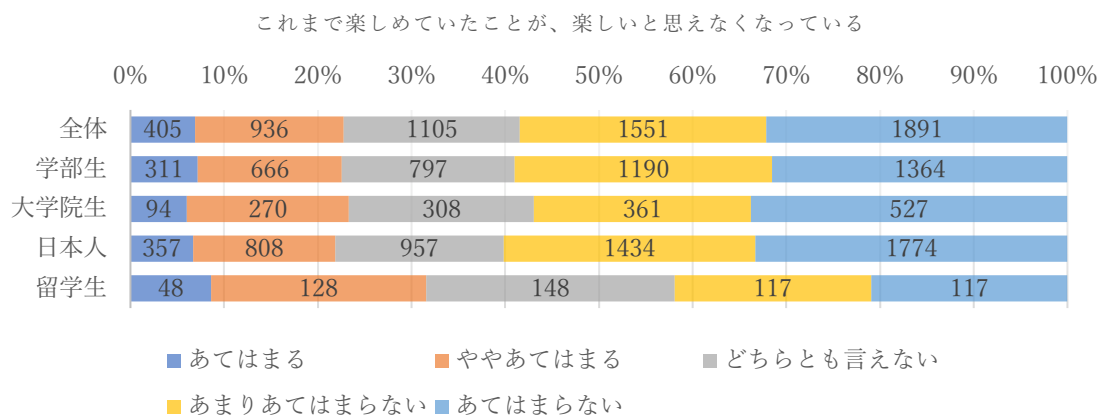


(担当:土本)

#### D. これまで楽しめていたことが、楽しいと思えなくなっている

全体では、1341名/5888名(22.8%)の学生が「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答し、3442名/5888名(58.5%)の学生が「あてはまらない」または「あまりあてはまらない」と回答した。

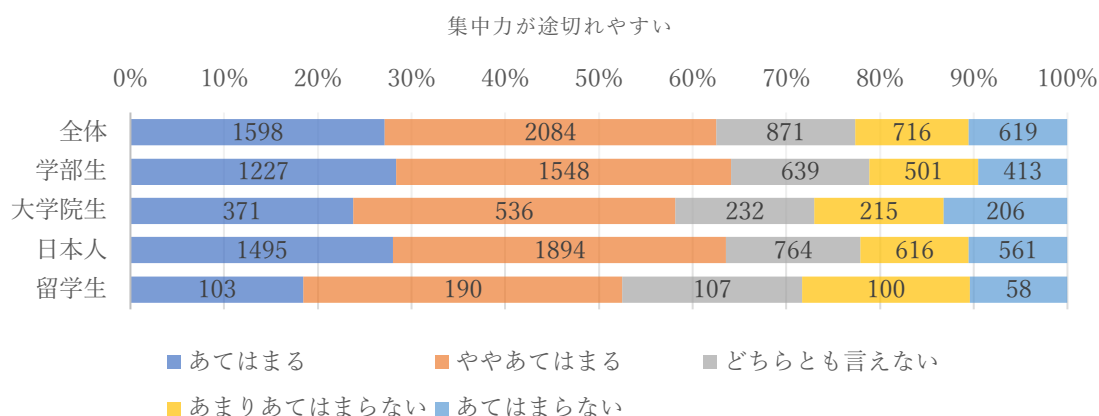
属性別では、学部生、大学院生、日本人学生においてもほぼ同様の割合であった。留学生については、「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答した学生は176名/558名(31.5%)であり、興味・喜びの減退が疑われる学生の割合が日本人学生1165名/5330名(21.9%)よりも多い傾向にあった。



(担当: 土本)

#### E. 集中力が途切れやすい

全体では、3682名/5888名(62.5%)の学生が「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答し、1335名/5888名(22.7%)の学生が「あてはまらない」または「あまりあてはまらない」と回答しており、集中力の低下を自覚している学生の数、そうでない学生の数と大きく上回っていた。属性別に見ると、集中力低下を自覚している学生は、学部生では64.1%、大学院生では58.1%、日本人学生では63.6%、留学生では52.5%であり、いずれも集中力低下を自覚していない学生より多かった。

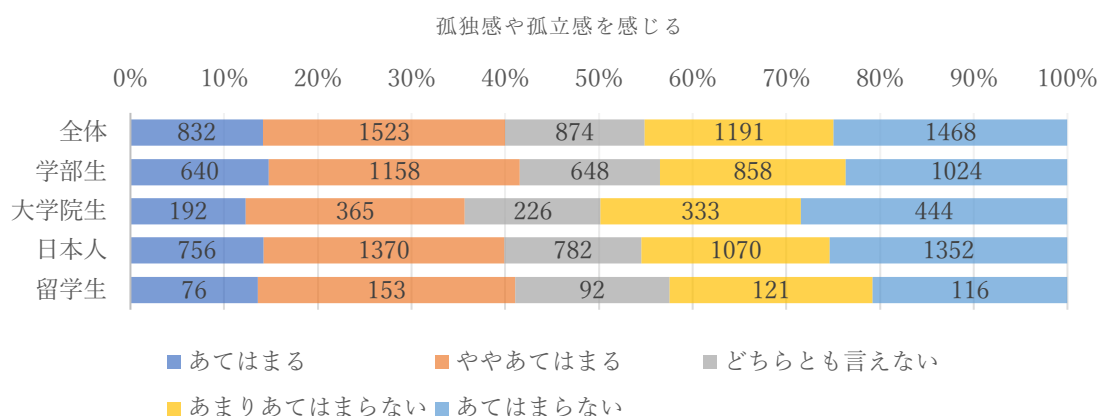


(担当: 土本)

#### F. 孤独感や孤立感を感じる

全体では、2355名/5888名(40.0%)の学生が「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答し、2659名/5888名(45.2%)の学生が「あてはまらない」または「あまりあてはまらない」と回答した。日本人と留学生に分けて集計しても、ほぼ同程度であった。

学部生と大学院生との比較においては、学部生では1798名/4328名(41.5%)が孤独感や孤立感を感じており、大学院生の557名/1560名(35.7%)よりも若干多い傾向を認めた。



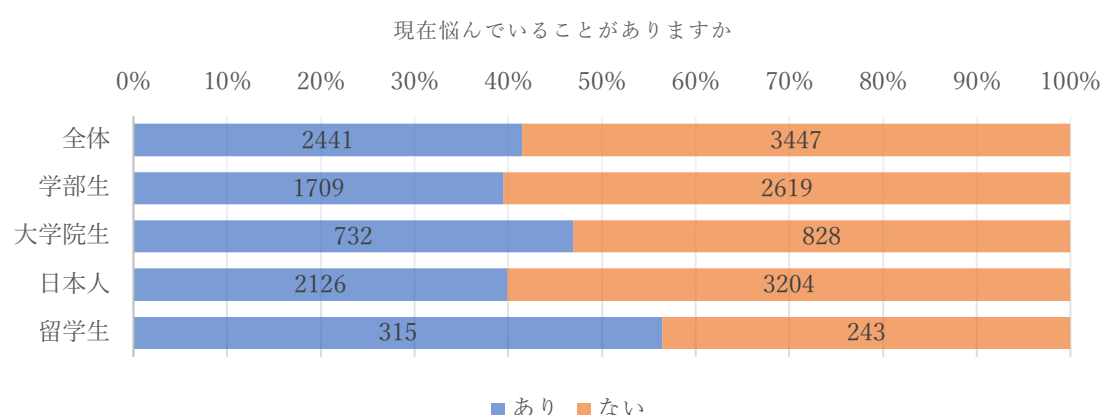


(担当:土本)

### (15)悩みの有無

**質問: 現在悩んでいることがありますか**

「悩みがある」と答えた学生は 2441 名/5888 名(41.5%)であった。学部生においては 1709 名/4328 名(39.5%)、大学院生においては 732 名/1560 名(46.9%)、日本人は 2126 名/5888 名(36.1%)、留学生においては 315 名/558 名(56.5%)の学生が「悩みがある」と答えた。

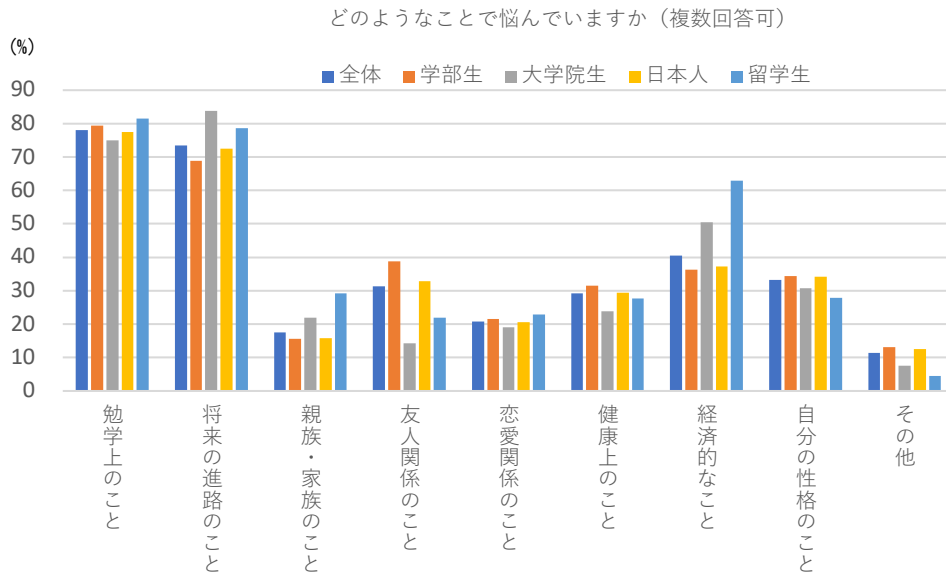


(担当:梶谷)

### (16)悩みの内容

**質問: どのような悩みがありますか。すべて選んでください(複数回答可)**

次に悩みの内訳について検討した(前の質問で、「悩みがある」と回答した 2441 名を対象とした)。学生全体の悩みの上位三位は「勉学上のこと」「将来の進路のこと」「経済的なこと」であった。学部生の悩み上位三位は「勉学上のこと」「将来の進路のこと」「友人関係のこと」であった。大学院生、日本人、留学生の悩み上位三位は学生全体同様、「勉学上のこと」「将来の進路のこと」「経済的なこと」であった。なお、グラフは「悩みがある」と回答した学生における割合を示している。特に留学生においては、「経済的なこと」と答えた学生が 6 割を超えていた。



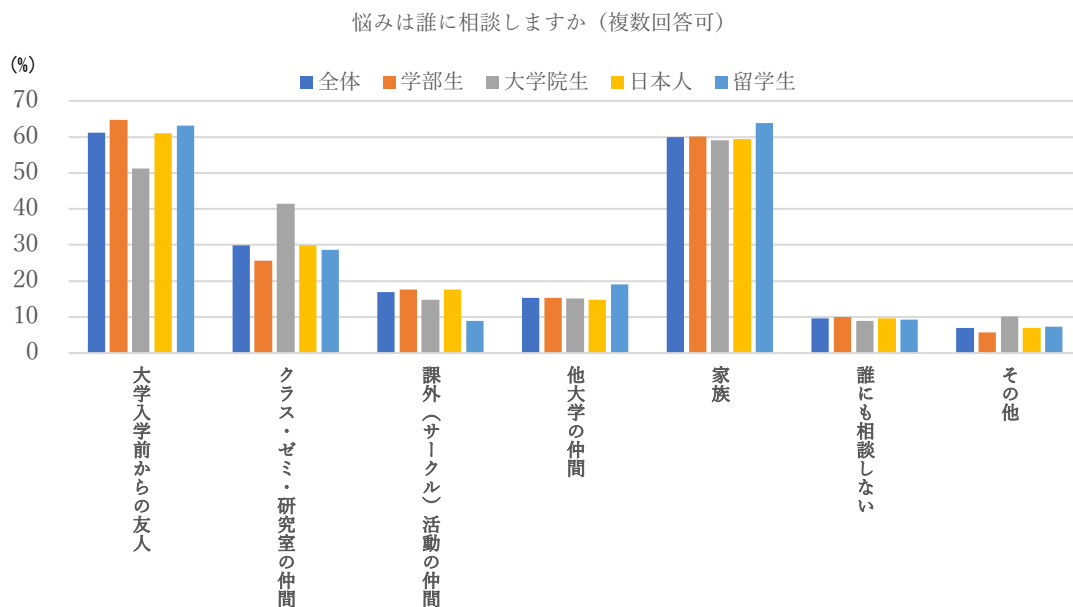
「悩みがある」と回答した学生のみを対象としている

(担当:梶谷)

### (17)悩みの相談先

#### 質問: 悩みは誰に相談しますか(複数回答可)

悩みの相談先については、学生全体、学部生、大学院生、日本人、留学生、いずれも上位三位は「大学入学前からの友人」「家族」「クラス、ゼミ、研究室の仲間」であった(順位の違いあり)。一方、「誰にも相談しない」という学生は全体で 554 名/5728 名 (9.7%)であった。この傾向は、学部生、大学院生、日本人、留学生でも同様であった。

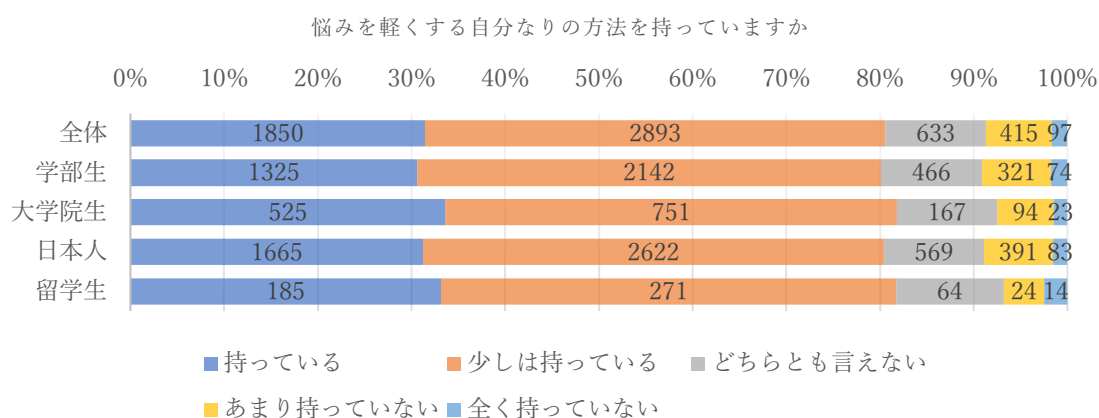


(担当:梶谷)

### (18)悩みや不安を解消する方法の有無

質問: 悩みや不安を軽くする自分なりの方法を持っていますか。

「持っている」「少しは持っている」と回答した学生は、全体で 4743 名/5888 名 (80.6%)であった。学部生、大学院生、日本人、留学生においても約 8 割の学生が「持っている」「少しは持っている」と回答した。



(担当:船津・梶谷)

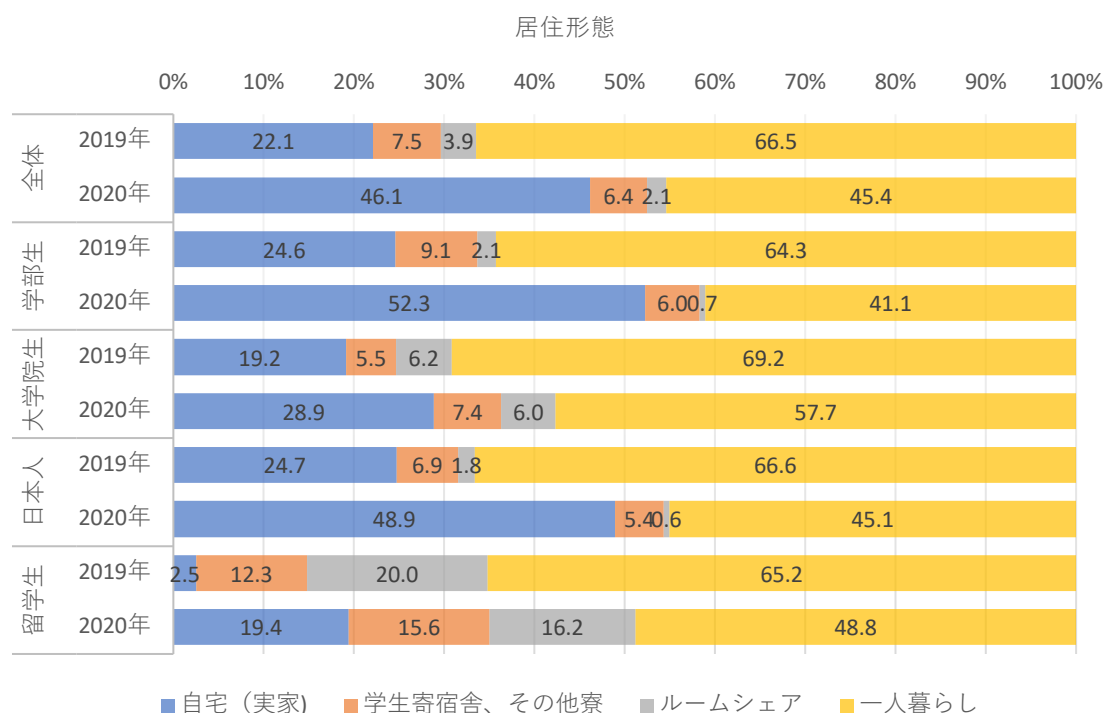
## 2.プレコロナ(2019 年度調査)とポストコロナ(2020 年度調査)の比較

次に今回の調査項目のうち 2019 年度に実施した学生生活実態調査報告書と重複するものについて結果を比較検討した。

### (1) 居住形態

#### ポストコロナでは、自宅(実家)暮らしの学生が増えた

学生全体における「自宅(実家)」の割合は、2019 年度(22.1%)と比較して、2020 年度(46.1%)には 2 倍以上に増加し、一方で「一人暮らし」の割合は 66.5%から 45.4%と低下した。「学生寄宿舍」および「ルームシェア」も 2020 年度わずかに減少した。学部生における「自宅(実家)」の割合は、プレコロナでは 24.6%であったのが、ポストコロナでは 52.3%と倍増した。大学院生においては 19.2%から 28.9%と約 10%の増加を認めた。留学生においては自宅(実家)の学生の割合が 2.5%から 19.4%と大幅に増大した。

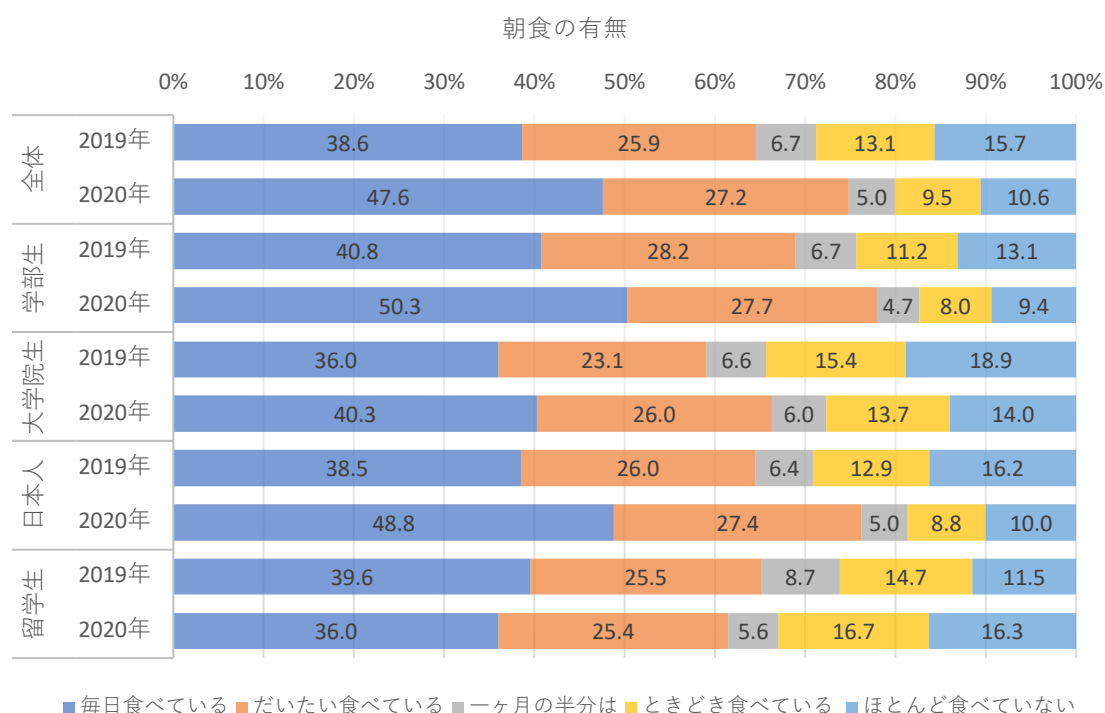


(担当:岸本)

### (2) 朝食の有無

#### ポストコロナでは、朝食を食べる学生は増加した?

学生全体における「毎日食べている」の割合は、38.6%であった2019年度に比べ、2020年度は47.6%に上昇した。これに伴い、「一ヶ月の半分は食べている」「ときどき食べている」「ほとんど食べない」の割合が2020年度は減少した。学部生での分析も同様の変化を示した。学部生での分析も同様の変化を示した。この傾向は、大学院生や日本人のみで分析した場合もみられたが、留学生のみの検討では「毎日食べている」の割合はわずかに減少した。



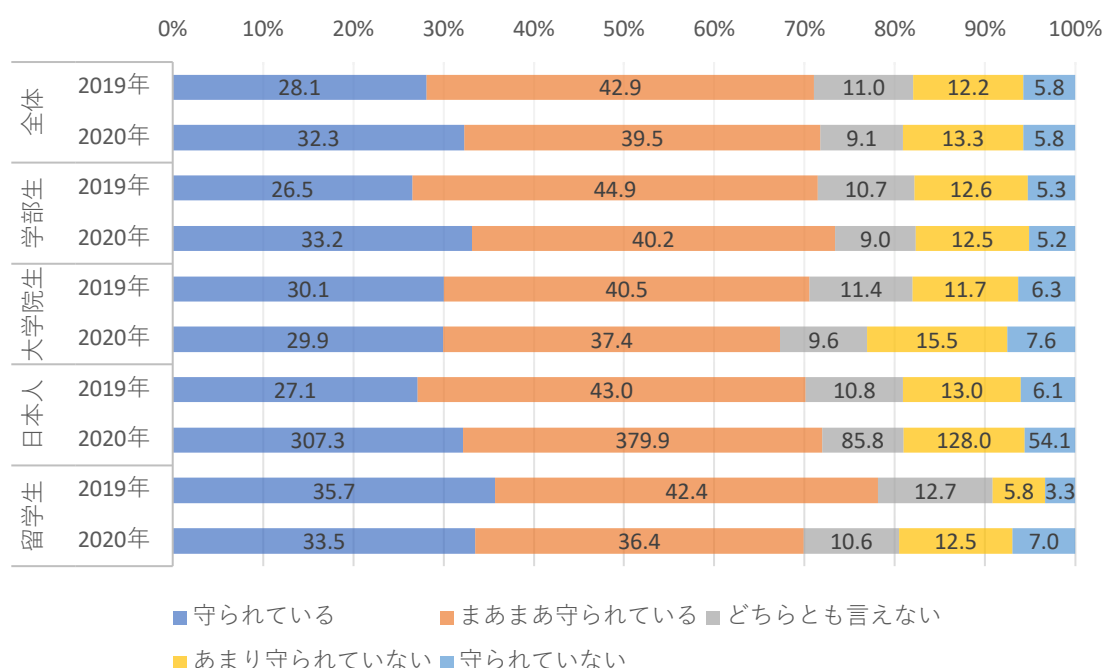
(担当:岸本)

### (3) 平日の起床時間のリズム

#### 意外にも学生の生活はポストコロナで乱れていない？

学生全体で、「守られている」「まあまあ守られている」と回答した割合は、2019年度調査と2020年度調査の間に大きな変化はみられなかった(71.0% vs 71.8%)。学部生・日本人のみで分析しても、この傾向は変わらなかった。一方、大学院生においては、「守られている」「まあまあ守られている」と回答した割合は若干減少し(3.3%減)、留学生においては、「あまり守られていない」「守られていない」と回答した割合が増加した(10.4%増)。

平日の起床時間のリズム

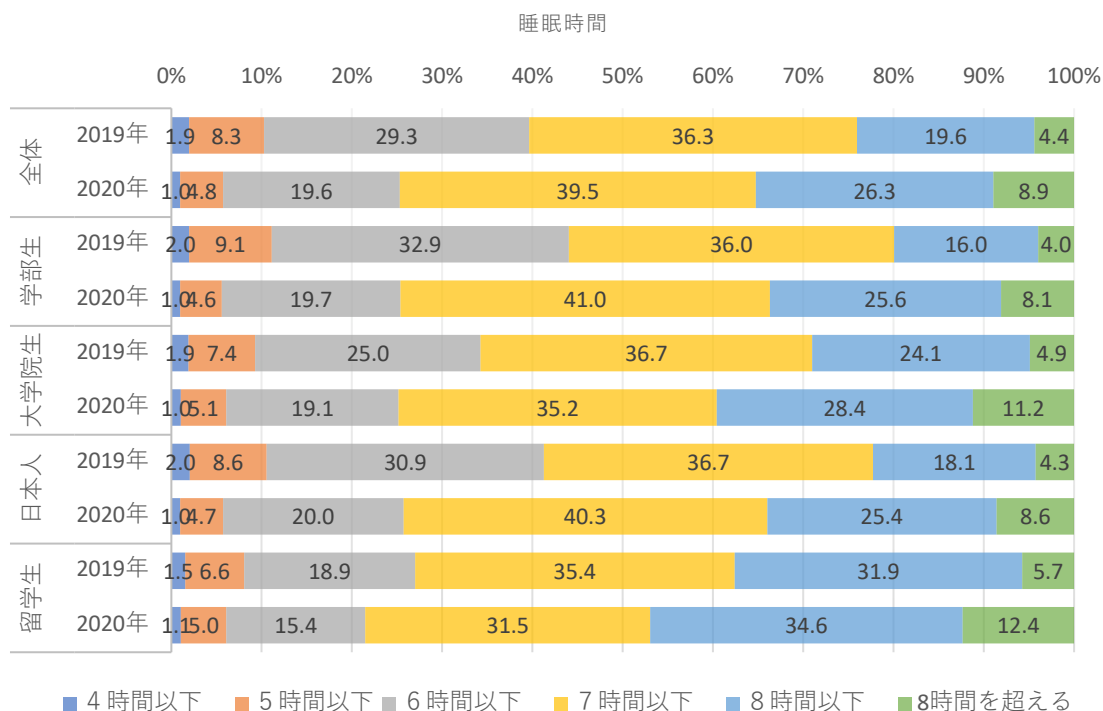


(担当:岸本)

#### (4) 睡眠時間

##### ポストコロナでは、睡眠時間が増加している

学生全体では、睡眠時間が5時間以下の割合は、2019年度では10.2%を占めていたが、2020年度では5.8%と減少した。一方、睡眠時間が「8時間を超える」割合は、2019年度では4.4%だったのが、今回の調査では8.9%と増加した。学部生、大学院生、日本人、留学生に分けて検討した結果も同様であり、いずれの属性においても睡眠時間が5時間以下の割合は2020年度では2019年度よりも減少しており、睡眠時間が「8時間を超える」割合は増加した。



(担当:土本)

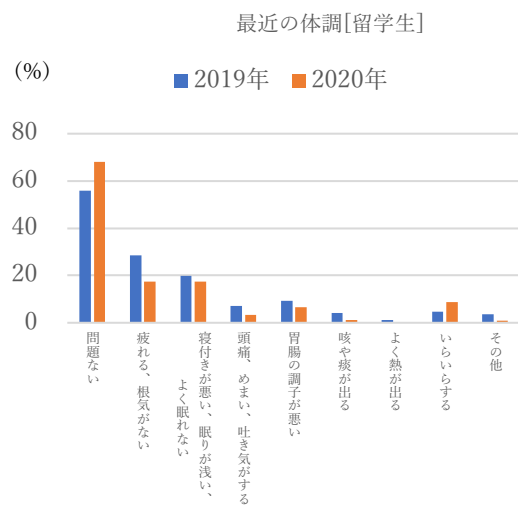
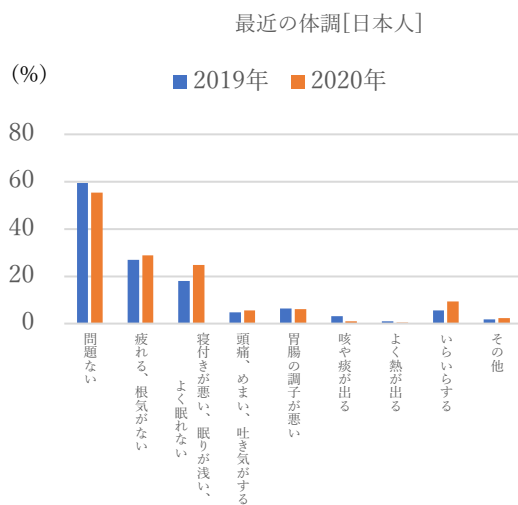
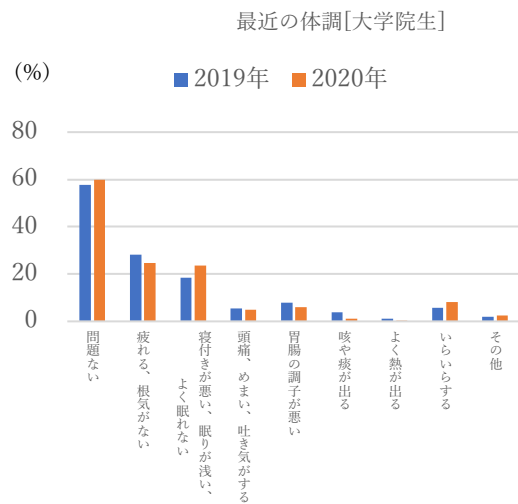
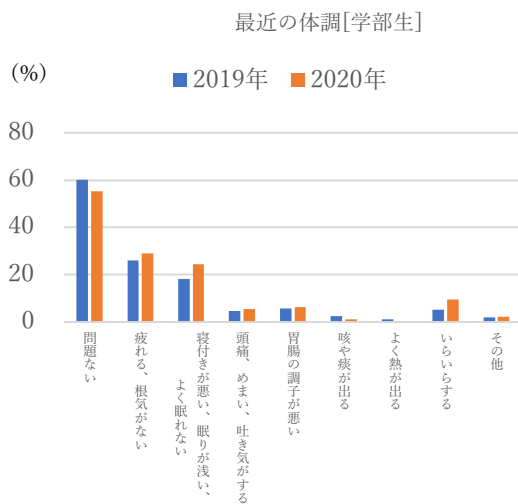
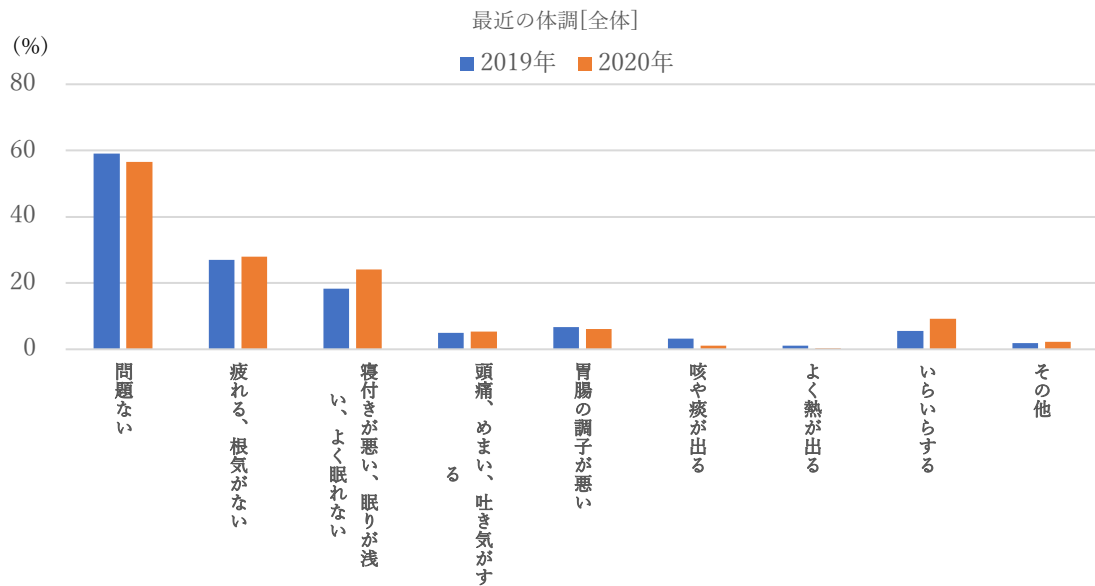
## (5) 最近の体調

### ポストコロナにおいては、メンタル面での不調が増えた？

学生全体で、体調に「問題ない」とした回答した割合は、2020年度では56.5%で、2019年度の59.0%とほぼ同等であった。2020年度において2019年度より増加した項目としては、「寝つきが悪い、眠りが浅い、よく眠れない」「いらいらする」などであり、メンタル面での不調の訴えの増加が目立った。学部生においては、体調に「問題ない」と回答した割合が、2019年度は60.0%、2020年度は55.3%であった。2020年度において2019年度より増加した項目としては、「疲れる、根気がない」「寝つきが悪い、眠りが浅い、よく眠れない」「いらいらする」などであった。大学院生での比較では、体調に「問題ない」と回答した割合が、2019年度は57.8%、2020年度は59.8%であった。消化器症状、呼吸器症状などの身体的訴えは減少傾向であったが、「寝つきが悪い、眠りが浅い、よく眠れない」「いらいらする」などのメンタル面での不調の訴えは増加傾向であった。日本人においては、体調に「問題ない」と回答した割合が、2019年度は59.4%、2020年度は55.3%であった。2020年度において2019年度より増加した項目は、「疲れる、根気がない」「寝つきが悪い、眠りが浅い、よく眠れない」「い

らいらする」などであった。留学生での比較においては、体調に「問題ない」と回答した割合が、2019年度は56.0%、2020年度は68.0%であった。不調の内容については、多くの項目において減少傾向であったが、「いらいらする」のみ増加していた。



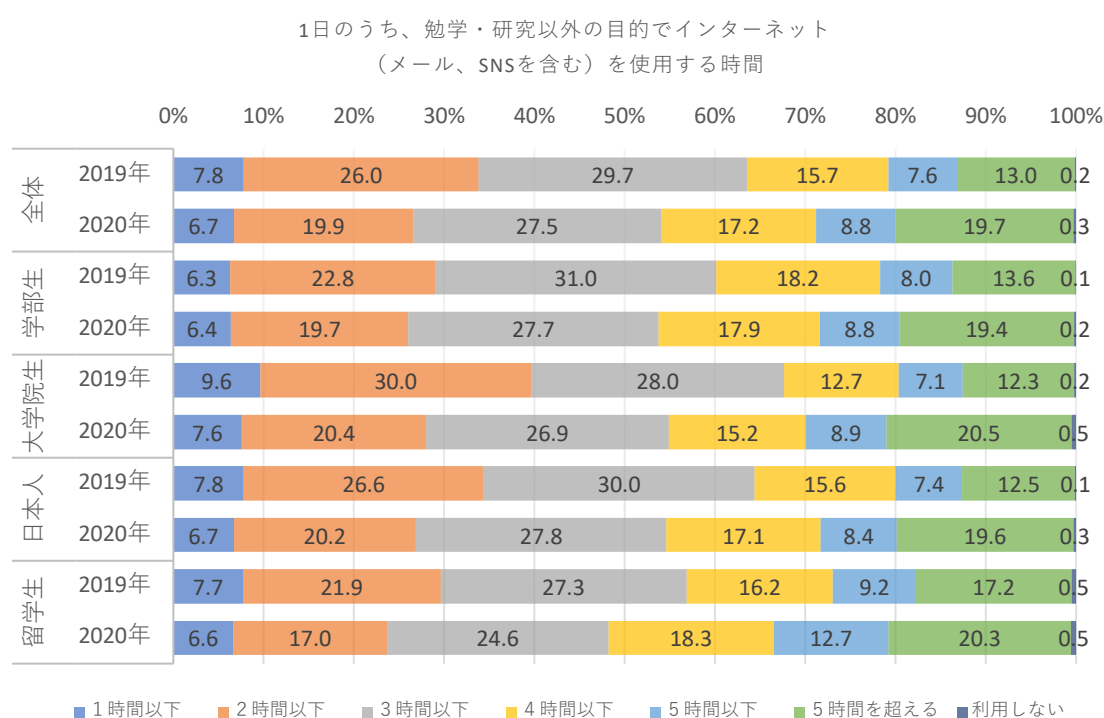


(担当: 土本)

(6)1日のうち、勉学・研究以外の目的でインターネット(メール、SNSを含む)を使用する時間

**ポストコロナにおいては、インターネット使用時間が増えた**

学生全体として「5時間を超える」と回答した割合は、2019年度の13.0%から2020年度は19.7%に上昇した。学部生での分析も同様に増加を示した。大学院生・日本人・留学生の別に分析しても、同様の増加傾向を認めた。



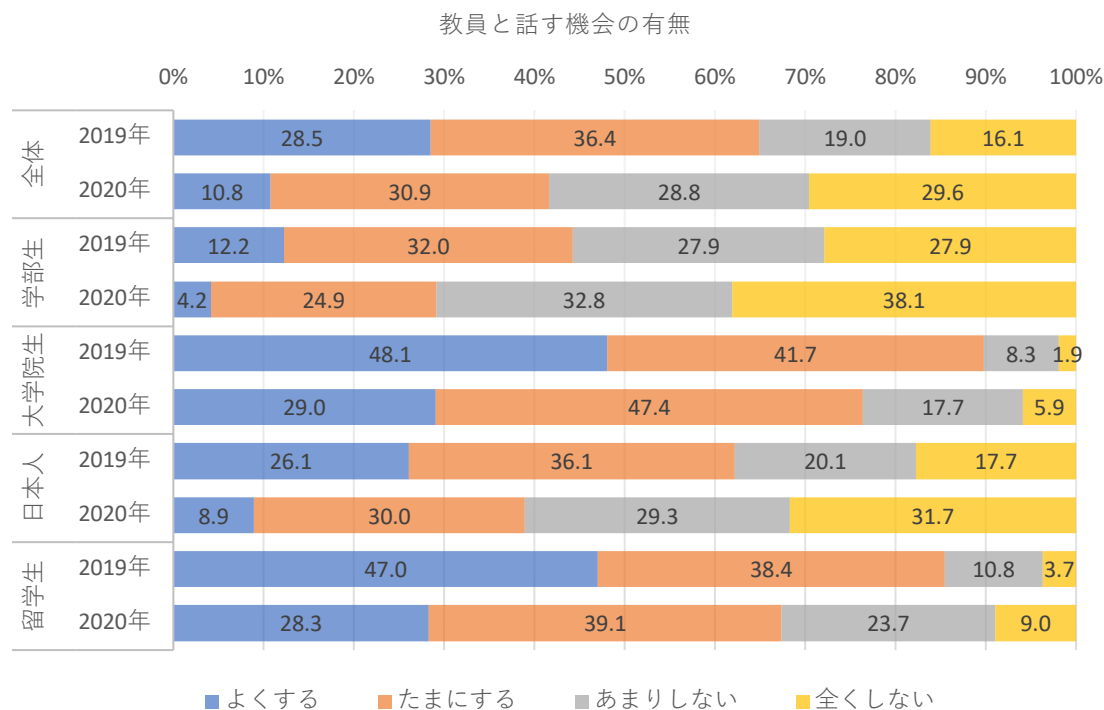
(担当:岸本)

(7)教員と話す機会の有無

**ポストコロナにおいては、学生と教職員のコミュニケーションは減少**

学生全体として2019年では64.9%の学生が「よくする」「たまにする」と答えていたが、2020年では41.7%に減少している(23.2%減)。学部生の比較においては、2019年では44.2%の学生が「よくする」「たまにする」と答えていたが、2020年では29.1%に減少している(15.1%減)。一方、大学院生においては、2019年度に「よくする」「たまにする」と答えた学生は全体の89.8%であったが、2020年度においては76.4%と減少して

いる(13.4%減)。日本人全体としては、62.2%から38.9%へ減少し(23.3%減)、留学生全体としては、85.4%から67.4%へ減少している(18.0%減)。



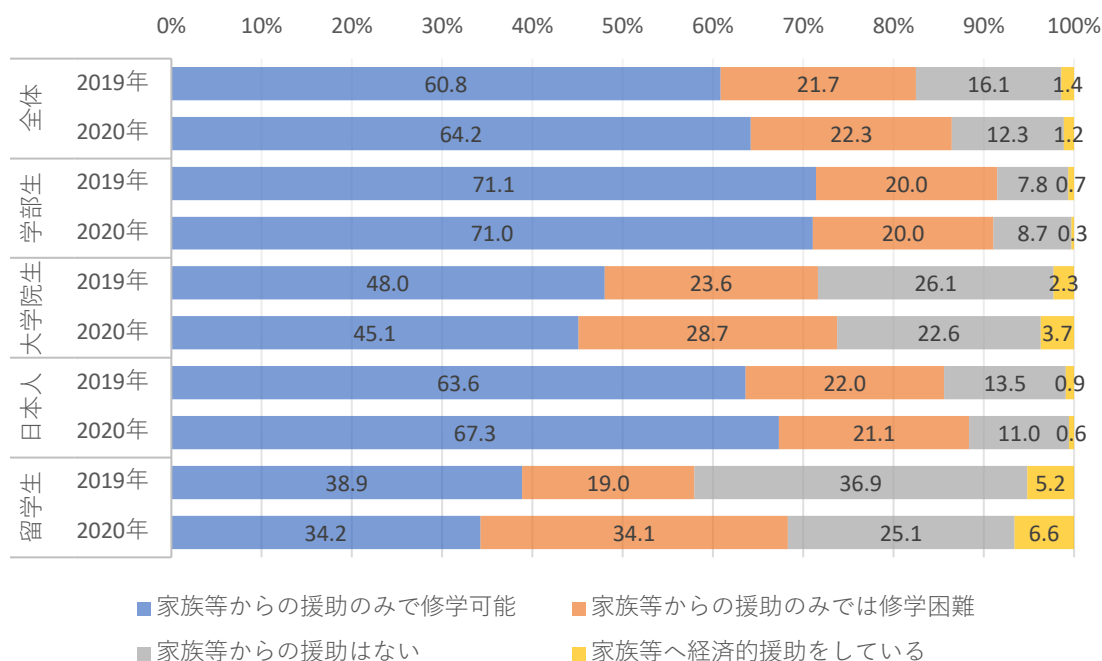
(担当:梶谷)

#### (8) 学生の経済状態と修学の関係

**6月時点では、経済面で困窮をしている学生は増えていない。**

学生全体として、「家族等からの援助のみで修学可能」と答えた学生の割合は、2019年度調査と2020年度調査の間に大きな変化はみられなかった(60.8% vs 64.2%)。この傾向は、学部生(71.4% vs 71.0%)、大学院(48.0% vs 45.1%)・日本人(63.6% vs 67.3)の別に検討しても同様であった。一方、留学生については、「家族等からの援助のみでは修学困難」の割合が2019年度に比べて2020年度で増えている(19.0% vs 34.1%)。

学生の経済状態と修学の関係



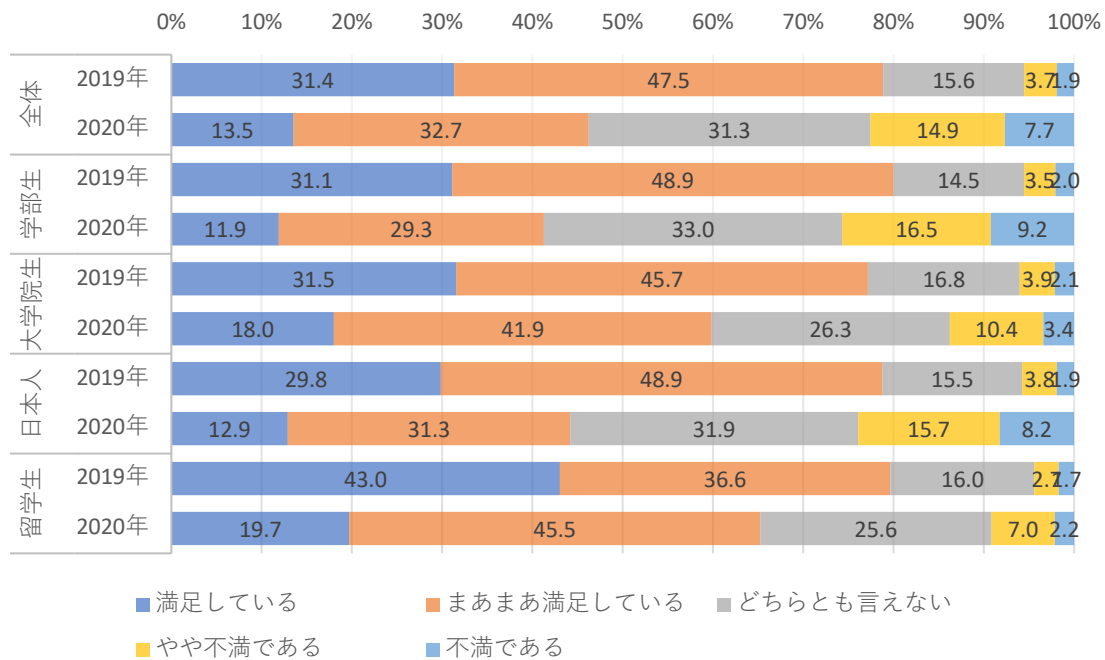
(担当:岸本)

(9) 大学生生活の満足度

**ポストコロナにおいて、大学生生活の満足度は学部生で大幅に減少しているが、留学生生では小幅な減少にとどまっている**

学生全体として、2019年では78.9%の学生が「満足している」「まあまあ満足している」と答えていたが、2020年では46.2%に減少している。これは学部生でも同様であり、2019年では80.0%の学生が「満足している」「まあまあ満足している」と答えていたが、2020年では41.2%に半減している。一方、大学院生においては、2019年では77.2%の学生が「満足している」「まあまあ満足している」と答えていたが、2020年では59.9%に減少している。日本人での比較においては「満足している」「まあまあ満足している」と答えた学生が78.7%から44.2%に減少した。留学生生においては「満足している」「まあまあ満足している」と答えた学生が79.6%から65.2%に減少した。

大学生生活の満足度

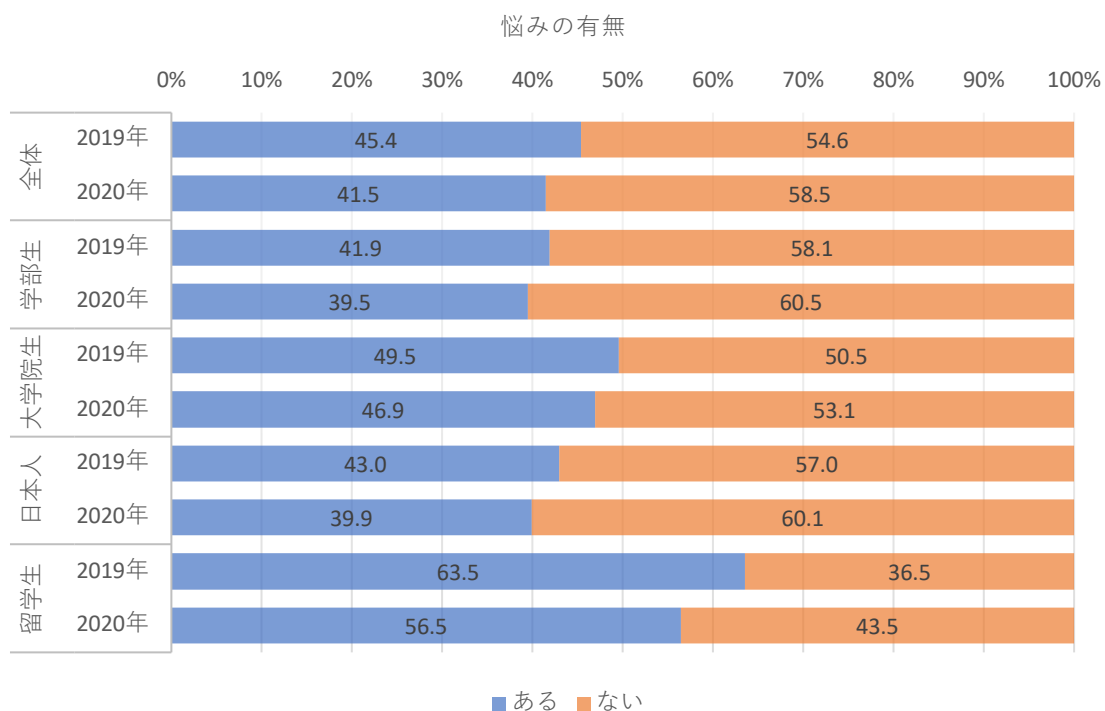


(担当:梶谷)

(10)悩みの有無

**ポストコロナにおいて、学生の悩みはむしろ減っている？**

学生全体の比較においては、2019年では45.4%の学生が「悩みがある」と答えていたが、2020年では41.5%に減少している。また、学部生の比較では、2019年に41.9%の学生が「悩みがある」と答えていたが、2020年では39.5%にわずかに減少している。大学院生では2019年において49.5%の学生が「悩みがある」と答えていたが、2020年では46.9%に減少している。日本人においては、2019年では43.0%の学生が「悩みがある」と答えていたが、2020年では39.9%に減少している。一方、留学生では2019年では63.5%の学生が「悩みがある」と答えていたが、2020年では56.5%に減少している。

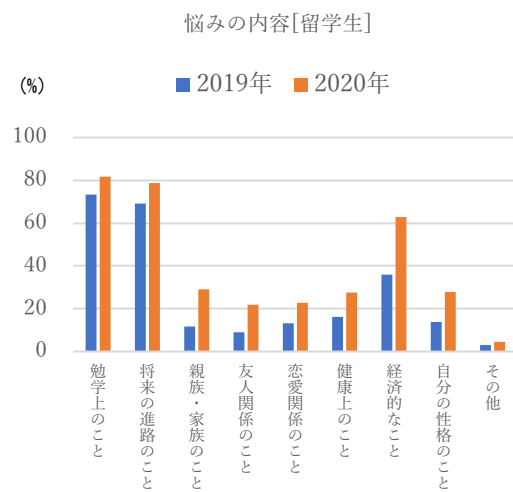
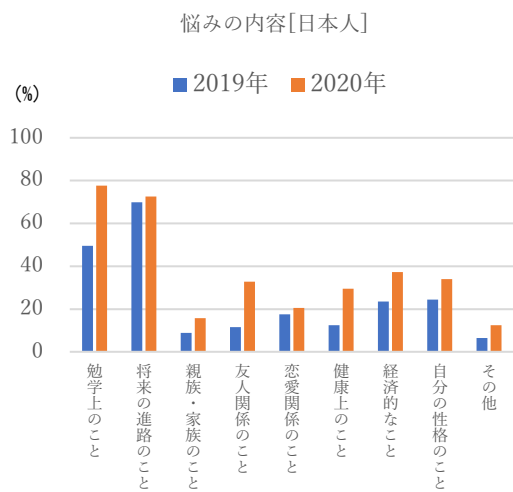
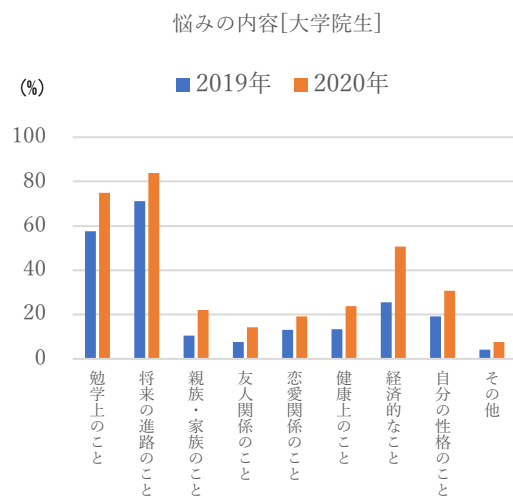
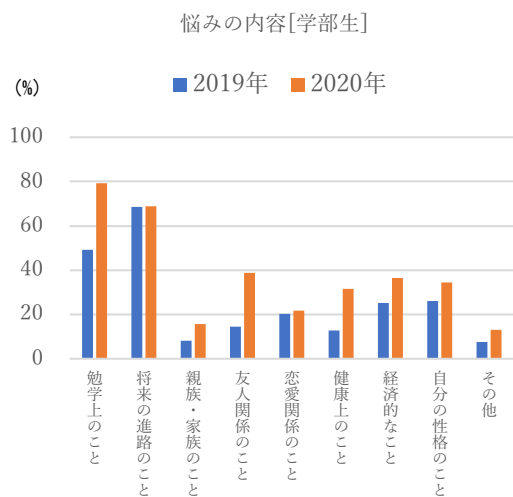
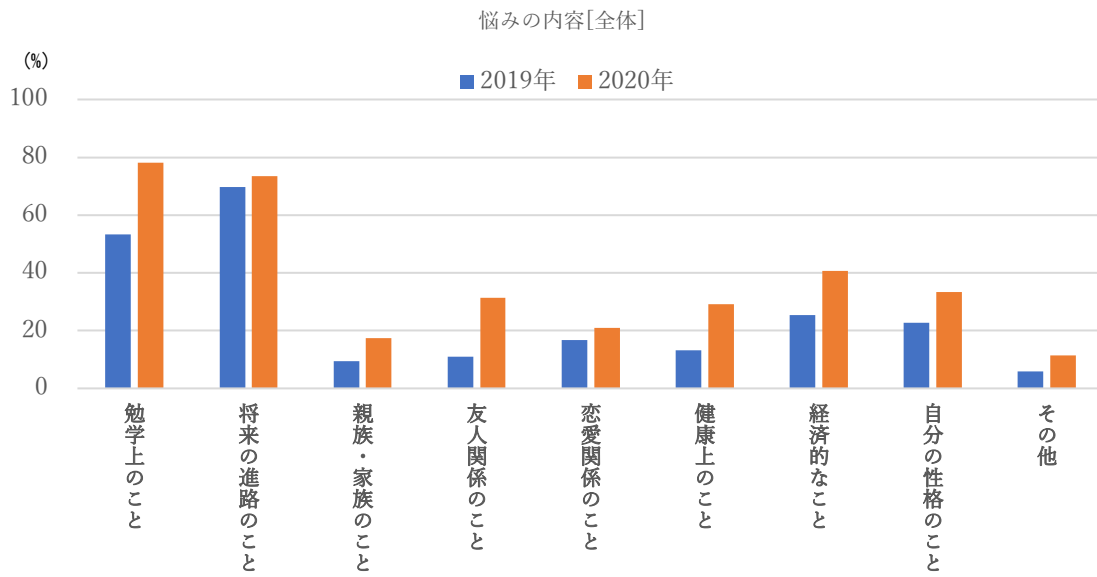


(担当:梶谷)

### (11)悩みの内容

#### ポストコロナにおいて、学生の悩みは勉強、友人、健康、お金

学生全体においては、9項目いずれも2019年に比べて2020年で増加しているが、特に増加ポイントが大きいのは、「勉強上のこと(24.5%増)」「友人関係のこと(20.3%増)」「健康上のこと(16.1%増加)」「経済的なこと(15.1%増)」であった。学部生においては9項目いずれも2019年に比べて2020年で増加しているが、特に増加ポイントが大きいのは、「勉強上のこと(29.9%増)」「友人関係のこと(24.2%増)」「健康上のこと(18.7%増加)」であった。大学院生においても9項目いずれも2019年に比べて2020年で増加しているが、特に増加ポイントが大きいのは、「経済的なこと(24.9%増)」「勉強上のこと(17.3%増)」であった。日本人での比較においては9項目いずれも2019年に比べて2020年で増加しているが、特に増加ポイントが大きいのは、「勉強上のこと(28.1%増)」「友人関係のこと(21.4%増)」「健康上のこと(17.0%増)」であった。留学生においては、9項目いずれも2019年に比べて2020年で増加しているが、特に増加ポイントが大きいのは、「経済的なこと(27.1%増)」「親族・家族のこと(17.6%増)」であった。



(担当:梶谷)

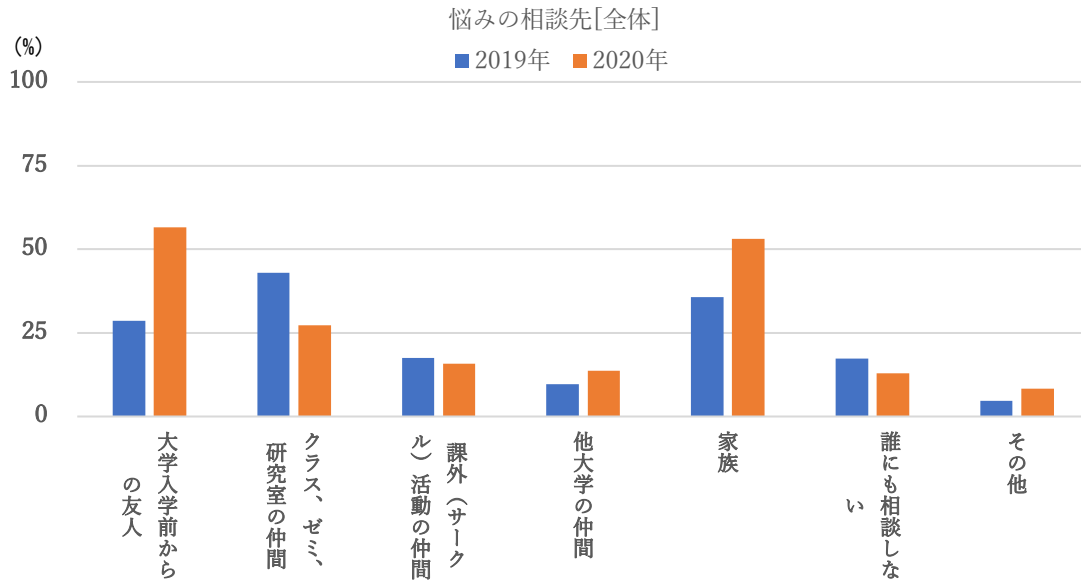
(12)悩みの相談先\*

**プレコロナとポストコロナを比較すると、相談先が変わりつつある？**

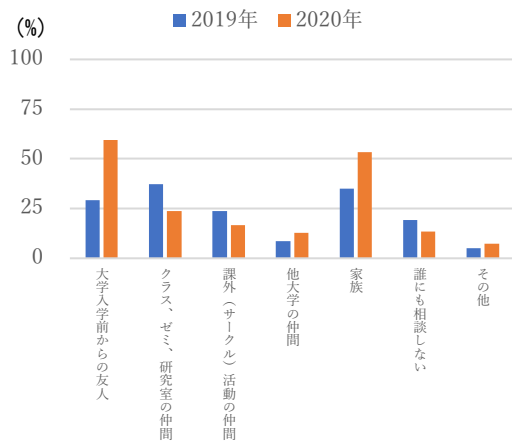
学生全体の比較においては、2019年で「クラス、ゼミ、研究室の仲間(42.8%)」「家族(36.1%)」「大学入学前からの友人(27.9%)」の順で多かったが、2020年においては、「大学入学前からの友人(56.6%)」「家族(53.1%)」「クラス、ゼミ、研究室の仲間(27.3%)」の順になった。学部生では学生全体と同様に、2019年においては「クラス、ゼミ、研究室の仲間(37.3%)」「家族(35.6%)」「大学入学前からの友人(28.4%)」の順で多かったが、2020年においては、「大学入学前からの友人(59.4%)」「家族(53.2%)」「クラス、ゼミ、研究室の仲間(23.7%)」の順になった。大学院生では、2019年において「クラス、ゼミ、研究室の仲間(48.5%)」「家族(36.7%)」「大学入学前からの友人(27.4%)」の順で多かったが、2020年においては、「家族(52.8%)」「大学入学前からの友人(50.2%)」「クラス、ゼミ、研究室の仲間(35.6%)」の順になった。日本人では、2019年において「クラス、ゼミ、研究室の仲間(42.4%)」「家族(35.0%)」「大学入学前からの友人(25.2%)」の順で多かったが、2020年においては、「大学入学前からの友人(55.3%)」「家族(52.3%)」「クラス、ゼミ、研究室の仲間(28.0%)」の順になった。留学生においては、2019年で「クラス、ゼミ、研究室の仲間(44.9%)」「大学入学前からの友人(41.8%)」「家族(41.8%)」の順で多かったが、2020年においては、「大学入学前からの友人(62.6%)」「家族(58.0%)」「クラス、ゼミ、研究室の仲間(22.6%)」の順になった。

(\* 2019年度は「悩みがある」と答えた学生を対象に調査。比較のため、2020年度についても「悩みがある」と答えた学生を対象にして再計算している。従って、2020年度調査「1.(17)悩みの相談先」とグラフは異なる。)

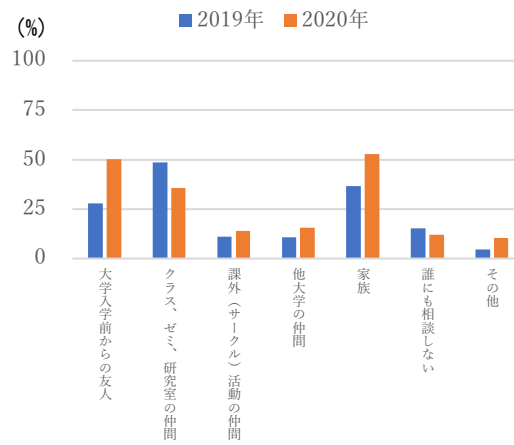




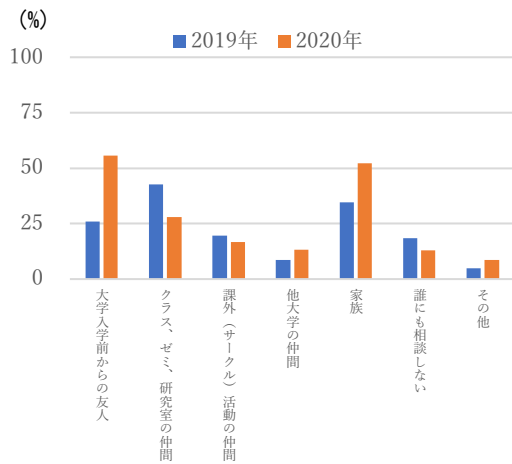
悩みの相談先 [学部生]



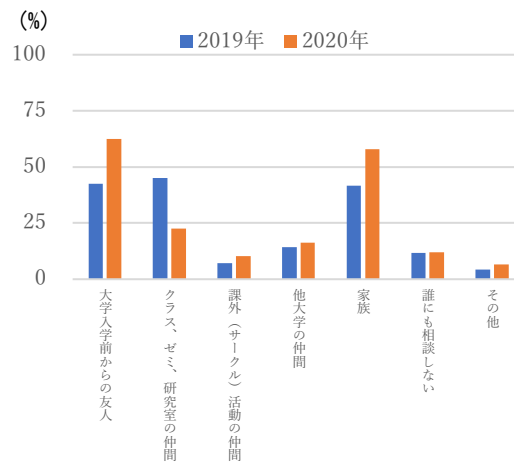
悩みの相談先 [大学院生]



悩みの相談先 [日本人]



悩みの相談先 [留学生]



(担当:梶谷)

## 考察

本調査の結果を(1)生活、(2)健康、(3)メンタルヘルス、(4)防御因子(ソーシャルキャピタルなど)、そして(5)大学生満足度の 5 つの観点から考察する。

### (1) 生活

ポストコロナにおける生活については、以下の 2 点にまとめられる。

1. 大学生生活のリズムは意外にも乱れていない。
2. インターネットに費やす時間が増えた。

ポストコロナの大学生生活はプレコロナと比べて大きく様変わりしたと考えられる。大学構内への立ち入りは禁止され、授業やゼミはオンラインになり、外出も強制ではないが制限されていた。ソーシャルディスタンスをとる必要性から、友人、教員、家族との face-to-face な交流も十分できず、「社会的拘禁」という状況を学生たちは強いられてきたであろう。このため、大学生の生活リズムは乱れると当初予想されていたが、朝食の摂取および起床リズムの結果から、意外にもポストコロナにおける大学生の生活リズムは大きく乱れていなかった。この要因の一つとして、自宅(実家)で過ごす学生が増えたことが考えられる。自宅で過ごせば、生活リズムは自ずと他の家族に合わせざるを得ず、生活リズムは乱れない可能性がある。

ソーシャルディスタンスを是とするポストコロナにおいて、最も重宝されたテクノロジーはインターネットであろう。この状況を反映してか、インターネットの使用時間(勉学・研究以外)については、プレコロナと比較して、どの属性においても増加を示した。インターネットの活用は恩恵もあるが、その一方で弊害も危惧される。それは、行動嗜癖であるインターネット依存症である。Young KS らの調査によるとインターネット依存症者の平均ネット接続時間は 38.5 時間/週であった<sup>(3)</sup>。この結果から週 30 時間以上インターネットを使用する者は、依存症に陥っている可能性が高いとみなす研究者もいる。ポストコロナ調査では 1 日 4 時間以上(週約 30 時間)インターネットを使用する学生が約 3 割を占めており、これらの学生にはインターネット依存症に関する啓発や健康支援が必要と考えられる。

### (2) 健康

ポストコロナにおける大学生の健康は、以下の 3 点にまとめられる。

1. 適切な睡眠時間が確保されている。
2. 少なくとも週に 1 度は運動をして健康維持・体力向上に努めている。
3. 体調に問題を抱える学生が微増し、その内訳は精神面に関連する項目が増

加した。

ポストコロナにおける大学生の健康は特に注視すべき問題である。ここでは健康に関連する項目について考察する。

睡眠時間の確保は、心身の健康を保つ為の基本である。睡眠障害は様々な精神疾患や身体疾患のリスク因子となりうるため<sup>(4)</sup>、睡眠の問題が持続するケースについては、積極的な医療介入が必要である。このように健康と深く関わる睡眠については、2019年度、2020年度いずれの調査においても、概ね適切に確保されていることがわかった(全体の8割以上が、5時間から8時間と回答)。また、睡眠不足に該当する「睡眠時間5時間以下」と回答した学生は、プレコロナで約10%、ポストコロナにおいて約6%と減少している。2015年に実施された全国の国立大学の大学生及び大学院生を対象とした大規模調査では、平均して睡眠時間が5時間より少ない学生は12%と報告されている<sup>(5)</sup>。この結果と比較しても、2020年度では睡眠時間の短い学生が減少している傾向があると言える。これは、オンライン授業の導入により自宅で過ごす時間が増え、その結果、睡眠時間が増加した可能性が考えられる。こうしてみるとポストコロナにおける大学生は十分睡眠時間を確保しているため、問題はないように見える。しかし、睡眠は単純に時間だけでは評価できない。睡眠の質、時間帯なども含めて詳細な調査が今後必要であろう。

また2020年度における「健康維持・体力向上につながる運動」に関しては、7割以上の学生が少なくとも週に1回行なっていることがわかった。この運動に関する項目は2019年度のアンケートにはないため、先行研究(学生の健康白書, 一般社団法人国立大学法人保健管理施設協議会, 2015)<sup>(5)</sup>を参考にする。同先行研究では、4年制学部生の34.2%が「運動しない」と答えている。この結果と比較すると、当大学における学生はポストコロナにおいても、全国平均よりも運動によって健康維持や体力維持をはかる学生の割合が多いことが分かる。引き続き、運動の重要性を学生に伝え、メンタルヘルスの維持や生活習慣病の予防をはかることが重要である。

体調に関しては、2019年度と比較して2020年度は、「問題ない」と答えた学生が若干減少している(2.5%減)。特に学部生についてはプレコロナに比べて4.7%も減少している。体調不良の内容については、学生全体として睡眠障害に関する項目、「イライラする」など精神面の項目で増加を認めた。このようにメンタルに関係する項目で軽度の増加を認めたが、この傾向は大学院生よりも学部生において顕著であった。一方、日本人と留学生を比較すると日本人では9項目中5項目で

増加しているのに対し、留学生では「イライラする」のみが増加した。留学生においては心身の不調の増加はそれほど顕著でないことが分かる。以上より、ポストコロナにおいては、体調面での軽度の悪化傾向を認めており、今後の学生達の健康状態をフォローアップする必要性が示唆された。

### (3) メンタルヘルス

ポストコロナにおけるメンタルヘルスは、以下 4 点にまとめられる。

1. 就職への不安を抱えている学生は多いが、プレコロナと比較して増加していない可能性がある。
2. うつ病には至らないものの、精神的な不調を自覚する学生が増加している可能性がある。
3. 4 割近くの学生が孤独感を感じている。
4. 悩む学生は減っているが、悩みの種類(悩みの種)は増えている。

ここではポストコロナにおける大学生のメンタルヘルスについて考察する。世の中が混乱し、社会不安が高まっている今日、学生達のメンタルヘルスの悪化が危惧されている。特にポストコロナにおける「将来への不安」は学生にとって大きな懸念であることは間違いない。今回の調査で、全体そして全ての属性において 6 割から 7 割弱の大学生が就職不安を抱えていることがわかった。しかし、この高い割合は「ポストコロナだから」というわけではないようである。平成 30 年度に実施した日本学生支援機構(JASSO)の「学生生活調査」によると、「希望の就職先または進学先へいけるか不安だ」の問いに「大いにある」「少しある」と答えた割合は 67.7%であった(学部生)<sup>(6)</sup>。この先行調査と比較すると、少なくとも 6 月時点における九大生に関しては、就職への不安はそれほど悪化していないことが分かる。

次に具体的な精神状態について検討する。特に抑うつ状態と COVID-19 パンデミックの関連は複数で報告されている<sup>(7)(8)</sup>。このため、大学生においても落ち込みが続き、修学や生活に支障をきたす場合は、早期の介入が望ましい。うつ病と関連する、「気分が落ち込んでいる(抑うつ気分)」「これまで楽しめていたことが、楽しいと思えない(興味喜びの減退)」については、「あてはまる」と回答した学生がそれぞれ全体の 13.3%、6.9%であった。前者については 2015 年度の「学生の健康白書」と比較すると、大きな差は認めなかった(14.6%)<sup>(5)</sup>。後者については、当センターが毎年 1 年生を対象に実施している「健康生活支援調査」の 2019 年度の結果を参考にすると、「物事に対してほとんど興味がない、または楽しめない」という問いに対して、2,622 名中 111 名(4.2%)が「はい」と答えている。この数字と比較す

ると、「これまで楽しめていたことが、楽しいと思えない(興味喜びの減退)」については、軽度の増加を示していることになる。いずれの先行調査も対象属性、質問項目などが同一ではないため単純比較は難しいが、ポストコロナにおいて、うつ症状をもつ大学生の割合は明らかな増加を示してはいないと言える。しかし、精神的不調にしばしば伴う「集中力が途切れやすい」については、上記うつ病主要症状よりも多く、全体の 27.1%が「あてはまる」と回答した。加えて不安や欲求不満と関連する「イライラする」については、前述の通りポストコロナで増加している。このことから、6 月時点における大学生の精神状態は、うつ病の水準までは発展していないものの、精神的不調を自覚する学生が増加している可能性がある。

今回の我々の調査では学生全体の 40%が「孤独感や孤立感を感じる」という質問に対して、「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した。当センターが毎年 1 年生を対象に実施している「健康生活支援調査」の 2019 年度の結果を参考にすると、「周りから孤立していると感じる」という問いに、「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答した学生は全体の 13.7%であった。この調査も対象属性や問いが異なるため、単純比較はできない。しかし、一般的に孤立感を感じやすい大学 1 年生で 13.7%であったことを考えると、今回の 40%という数字は高いことがわかる。孤独感の高まりは、精神病症状や不安・抑うつとの関連が指摘されている<sup>(9)(10)</sup>。実際、WHO も孤独感を「主要な健康への懸念」の一つとして挙げている<sup>(11)</sup>。COVID-19 流行の対策として周囲と物理的距離をとる事が推奨されている現在、学生が孤独感を解消できる工夫は重要な課題であろう。

「悩みがある」と答えた学生は 2019 年度では全体の 45.4%であり、2020 年度においては 41.5%と減少を示した。一方、「悩みがある」と答えた学生を対象に、その「悩みの内容」を調査したところ、9 項目全てで増加を認めた。悩みの上位としては、「勉学上のこと」、「将来の進路のこと」、「経済的なこと」、「健康上のこと」が挙げられるが、増加が大きいものについては各属性で多少異なる。「大学生の悩み」に類似する意識調査については、全国大学生生活協同組合連合会が 2019 年に実施した「第 55 回学生生活実態調査」がある(国公立および私立大学学部生 10,832 名を対象)。この調査の中で、「日常生活で気にかかっていること」について質問しているが、上位に挙げられた項目は、「生活費やお金のこと(43.1%)」、「授業・レポート等勉学上のこと(41.0%)」、「就職のこと(36.7%)」であった<sup>(12)</sup>。今回の調査結果と比較すると、順位や割合は異なるが、勉強、経済(お金)、将来(就職)の 3 つは、大学生に共通する悩みと言える。

今回の調査では「悩みがある」と答えた学生は減少しているにもかかわらず、「悩みの内容」は増加している。これは、悩む人が増えたということではなく、一人が抱える悩みの種類が増えたことを示す。つまりポストコロナという感染への不安や行動制限を伴う社会においては、「悩みの種」が増えるということの意味する。類似の先行研究については、我々が調べた限りでは国内外に認められず、海外や国内の大学における調査との比較が必要と考えられる。

#### (4) 防御因子(ソーシャルキャピタルなど)

防御因子については、以下の3点にまとめられる。

1. 経済的に困っている学生は増えていない(留学生は例外)。
2. 教員とのコミュニケーションは減ったが、SNSを利用して友人とはつながりを保っている。
3. 悩みの相談先は、学内から学外へシフトした。

人がストレスに耐えうるか否かは、ストレスの強度だけでなく、ストレスを受ける側の防御因子も重要な因子である。ここではストレスに対する防御因子から考察する。

COVID-19は経済的な面で世界的に影響を及ぼしており<sup>(13)</sup>、大学生の経済的支援の状況も懸念される。今回の調査で「家族等からの援助のみでは修学困難」と答えた学生は全体の22.4%であり、前年度(21.7%)と大きな違いは認められなかった。少なくとも6月時点においては、経済的支援は以前と同様であることがわかる。しかし、留学生においては修学困難と答えた学生が19.0%から34.1%と大幅に増加している。この結果から、留学生に対する経済的支援は重要な課題であることが言える。個別に相談に来た学生の話によると、新型コロナウイルス感染の影響でアルバイト等の求人激減や雇い止めが相次いでいる。生活維持にアルバイト等の収入が必要な学生への対応が急務かもしれない。

社会的つながりは、心理的幸福感と密接な関係があり<sup>(14)</sup>、加えてうつ症状を減らすことなど、ストレスへの耐性と関連する<sup>(15)</sup>。しかし、ポストコロナにおいてはコミュニケーション不足が指摘されており、大学生の心身への影響が懸念される。今回の調査によるとポストコロナの大学生は、教員とのコミュニケーションが20%以上低下した。一方、友人と直接話しをするか否か(電話・ネットも含む)については、全体で「よくある」「たまにある」と回答した学生は64.0%であり、学部生(61.6%)、日本人(62.8%)も同様の割合であった。大学院生については70.7%、留学生については76.2%と友人とのコミュニケーションは比較的良好であった。しかし、友人とのコミュニケーションを「全くと

っていない」という学生が全体の 14.8%を占め、これは学部生で顕著であった(16.4%)。これらの結果から、学生と大学(教員)のつながりを強化する必要がある一方、友人とのコミュニケーションが全くとれていない学生に対して、社会的つながりを得る機会を提供する必要があると考える。「SNS を利用している目的」については、「新しい情報を得るため」「これまでの友人関係を維持するため」「新しい友人関係を構築するため」が、いずれの属性でも上位を占めた。SNS は希薄になりつつある学生の社会的つながりを補うインフラになりつつあるようである。

悩みの相談先については、2020 年度では「大学入学前からの友人(56.6%)」「家族(53.1%)」「クラス、ゼミ、研究室の仲間(27.1%)」の順が多かった。2019 年度においては、「クラス、ゼミ、研究室の仲間(43.0%)」「大学入学前からの友人(28.6%)」「家族(35.7%)」の順であり、「クラス、ゼミ、研究室の仲間」への相談は 10%以上減ったが、「大学入学前からの友人」「家族」への相談は約 20%増加した。これは大学で学生同士のコミュニケーションがとりにくいため、代わりに大学以前の友人や家族に相談をしていることを示している。

悩みや不安を解消する方法を持っているかについて尋ねたところ、およそ 8 割の学生がなんらかの方法を持っていると回答した。一方およそ 6~9%の学生が「あまり持っていない」「全く持っていない」と回答しており、これは 2019 年の「学生生活実態調査」において同様の質問に「解消方法がわからない」と答えた学生が学部生・院生共に 4%前後であることと比較するとやや大きい割合となっており、特に学部生の割合が 8.9%とやや高い数値となった。過去の生活実態調査において、どの年度でも「先輩・友人等に相談する」割合が最も高い。これを鑑みると、人との関わりが断絶され「他者に相談する」という方法を取りにくいことで、悩みや不安への対処方法を見いだせない学生の割合が増加していることが推察される。

## (5) 大学生生活満足度

最後に、大学生生活満足度について考察する。前述の通り、全体として大学生生活への満足度は 78.9%から 46.2%へ大幅に減少している。この傾向は、学部生に顕著であった。留学生においては 79.6%から 65.2%と他の属性と比較して低下の割合は少なかったが、15%近い低下を認めている。ポストコロナにおいては、様々な活動(授業、サークル、飲み会、各種イベント)が制限され、学生自身も外出を控えている。ポストコロナにおける大学生生活は、学生が思い描いていたものとはかけ離れており、その結果「大学生生活の満足度」を大幅に減らしたことは容易に想像がつく。大学生生活全般の満足

度に関する先行調査として、ベネッセ教育総合研究所が実施した「第3回大学生の学習・生活実態調査」がある<sup>(16)</sup>。この調査によると、2008年に大学生活について「とても満足している」「まあ満足している」と答えた学生が全体の64.1%であったのに対し、2016年には51.1%と減少していた(全国大学1-4年生4,948名を対象)。この調査と比較しても、今回の調査において学生の満足度は低い結果となった。

## 結論

今回のアンケート結果から、プレコロナと比較してポストコロナの学生生活は様変わりしたことが明らかになった。そのような状況でも、インターネットやSNSを介して友人とのコミュニケーションを維持したり、運動をしたり、規則的な生活を送ることによって、健全な生活を維持しようとする本学学生の平均的な姿が、本調査によって垣間見られた。同時に、様々な面から学生への支援が必要であることが明らかになり、特にメンタルヘルス、社会的つながりという観点からのサポートが重要であることが示唆された。

## 参考資料

1. WHO, Novel coronavirus (2019-NCov) situation report 1. World Health Organization; Geneva: Jan 11, 2020. [www.who.int/docs/default-source/coronaviruse/situation-reports/20200121-sitrep-1-2019-ncov.pdf?sfvrsn=20a99c10\\_4](http://www.who.int/docs/default-source/coronaviruse/situation-reports/20200121-sitrep-1-2019-ncov.pdf?sfvrsn=20a99c10_4)
2. Johns Hopkins University School of Medicine, COVID-19 dashboard by the center for systems science and engineering (CSSE) at JHU. <https://coronavirus.jhu.edu/map.html>
3. Young KS and Rogers RC, *CyberPsychology & Behavior* 1998; 1:25-8
4. Buysse DJ. Insomnia. *JAMA*. 2013; 309(7):706-16.
5. 学生の健康白書, 一般社団法人国立大学法人保健管理施設協議会, 2015
6. 日本学生支援機構, 平成30年度学生生活調査結果, 2020
7. Vindegaard N, Eriksen Benros M. COVID-19 pandemic and mental health consequences: Systematic review of the current evidence. *Brain Behav Immun*. 2020; S0889-1591(20)30954-5.
8. Gunnell D, Appleby L, Arensman E, et al. Suicide risk and prevention during the COVID-19 pandemic. *Lancet Psychiatry*. 2020; 7(6):468-71.



9. Hajdúk M, Dančík D, Januška J, et al. Psychotic experiences in student population during the COVID-19 pandemic. *Schizophrenia Res.* 2020; doi.org/10.1016/j.schres.2020.05.023
10. Elovainio M, Hakulinen C, Pulkki-Råback L, et al. Contribution of risk factors to excess mortality in isolated and lonely individuals: an analysis of data from the UK Biobank cohort study. *Lancet Public Health.* 2017; 2(6): e260-6.
11. Cacioppo JT and Cacioppo S, The growing problem of loneliness. *Lancet.* 2018; 391:426
12. CAMPUS LIFE DATA 2019, 全国大学生生活協同組合連合会, 2020
13. Maliszewska M, Mattoo A, van der Mensbrugghe D, The potential impact of COVID-19 on GDP and Trade. A preliminary assessment. World Bank Group. 2020; <https://openknowledge.worldbank.org/handle/10986/33605>
14. Kawachi I and Berkman LF, Social ties and mental health. *J Urban Health.* 2001; Sep;78(3):458-67. doi: 10.1093/jurban/78.3.458.
15. Sasaki Y, Tsuji T, Koyama S, Tani Y, Saito T, Kondo K, Kawachi I, Aida J, Neighborhood Ties Reduced Depressive Symptoms in Older Disaster Survivors: Iwanuma Study, a Natural Experiment. *Int J Environ Res Public Health.* 2020; Jan 3;17(1):337. doi: 10.3390/ijerph17010337.
16. ベネッセ教育総合研究所 第3回大学生の学習・生活実態調査 速報板. 2016

学生生活およびオンライン授業に関する学生アンケート  
実施ワーキンググループ \*

丸野 俊一（九州大学: 理事・副学長）

丸山 徹（九州大学 キャンパスライフ・健康支援センター: センター長・教授）

野瀬 健（九州大学 基幹教育院 兼 教育改革推進本部: 教授）

田中 真理（九州大学 基幹教育院 兼 キャンパスライフ・健康支援センター 兼 大学院人間環境学府: 教授）

梶谷 康介（九州大学 キャンパスライフ・健康支援センター: 准教授）

岸本 裕歩（九州大学 基幹教育院 兼 キャンパスライフ・健康支援センター 兼 大学院人間環境学府: 准教授）

土本 利架子（九州大学 キャンパスライフ・健康支援センター: 准教授）

長沼 祥太郎（九州大学 教育改革推進本部: 講師）

鄭 漢模（九州大学 教育改革推進本部: 特任助教）

\*(令和2年8月報告書作成時の所属および役職)